慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	八文字屋刊行浮世草子書誌解題稿(一)
Sub Title	
Author	林, 望(Hayashi, Nozomu)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1982
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.19 (1982.) ,p.351- 408
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	阿部隆一名誉教授追悼記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000019-0351

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

八文字屋刊行浮世草子書誌解題稿（一）

林　望

本稿は、京都の八文字屋八左衛門が刊行した、若しくは刊行に関与したと認められる浮世草子作品について、現存する諸本を実地に調査し、その極力網羅的な遂行を以て、刊・印・修・求板等の刊行史的事実を実証し、やがて一の有機的書誌解題を試みようとするものである。そのことが、今後の八文字屋本、延いては西鶴以後の浮世草子研究の為の基礎資料として幾らかでも役に立ちはすまいかと思うからである。

さて、調査と著録に当っては、次の様な方法に拠った。

一、目録・諸解題の操作のみによって記述することはせず、必ず自身の実査に基いて比較考察する。

一、調査に当っては、出来るだけ精細な書誌記述をなすことは勿論であるが、ただに機械的記述をなすにとどまることなく、可能な限り必ず写真若しくはコピーによる書影見本又は全巻複写を作成し、調査には之を携行して、各本の比較調査を行った。このことは、刊・印・修、ということを明らめるために必須の作業である。原本が家蔵又は慶應義塾図書館蔵等の場合は直接原本を携行して、一丁毎に比較を行った。しかし、其の多くは、他図書館蔵本で帯出不可能の為、やむを得ず次善の方法として写真等による比較を行ったのである。

一、当該書の刊行史的事実究明の為、周辺の諸作品、絵入狂言本、役者評判記、絵本番付、等にも調査を及ぼした。

右の諸原則に従って調査をすすめようとすれば、その金銭的負担だけでも決して容易なことではない。殊に浮世草子は、点数が多い上に、一点が比較的厚冊で、しかも全国に散在しているためである。

ここに於て、幸いに、トヨタ財団より「国書並に漢籍総目録の編纂」（阿部隆一代表）のプロジェクトチームに対し、巨額の助成が寄せられ、私の調査もその一部門として参加せしめられたために、一体どれほどの便益を与えられたか知れない。本稿の如きは、右の助成なくしては、到底成し得なかっただろう

ことを思うにつけて、ここにその事を明記し以て深謝の意に代えようと思うのである。

扨、現在迄に調査を及ぼした所は左の通りである。

国立国会図書館。天理図書館。東洋文庫。東京大学附属総合図書館。同霞亭文庫。同国文学研究室。東北大学附属図書館狩野文庫。慶應義塾図書館。同斯道文庫。早稲田大学附属図書館。同国文学研究室。京都大学附属図書館。同国文学研究室。同潁原文庫。同教養部林文庫。京都府立総合資料館。名古屋大学附属図書館岡谷文庫。同皇学館文庫。広島大学国文学研究室。筑波大学附属中央図書館。東京都立中央図書館加賀文庫。同東京志料。同特別買上文庫。大阪府立中之島図書館。三康図書館。横山氏赤木文庫。名古屋市立蓬左文庫尾崎久弥コレクション。西尾市立図書館岩瀬文庫。広島市立中央図書館。大東急記念文庫。岡山大学附属図書館池田家文庫。香川大学附属図書館神原文庫。関西大学附属図書館。吉田幸一氏。早稲田大学演劇博物館。其外。（順不同）

調査の過程で、困却した一つの事実は、八文字屋本の如きものに就ての、適切な書誌記述用語がないことであった。そこで私は先に「八文字屋刊行浮世草子類書誌提要」を本論集第十七輯に発表して、そこにいくつかの私案を提出して置いた。これは、主として八文字屋本の書誌を概論して、その消長を書誌方面から展望し、かつは本解題記述のための序論たらしめようと意図したものであった。従って本稿に於ては、右拙稿中に私に用意した述語を用いて記述したいと考えるのでこの点どうか諒とせられたい。今、その主たるものを左に略述しておく。（詳しくは拙稿を参照されたい。）

㈠、八文字屋刊浮世草子の版心は多く白口で、その柱に略題・巻・丁を刻し、そのほかに必ず、巻次を標示する太目の横線とでもいうべきものなどを、巻の下るに従って、下に配するを例とする。この様式は、八文字屋の浮世草子には殆ど例外がないので、之を「八文字屋様式」という一語で説明する。また、その巻次を標するマークは、多くは黒い四角形であるが、それが双つの場合、又は丸や線、文字など、各種のバラエティがある。これらを総称して「巻標」と称する。又、それが単に黒い四角である時「黒格」と表記した。（拙論四六一頁）

㈡、八文字屋の大本は、徐々に縮小して、しまいに、半紙本と余り変らなくなってしまう。そしてその区別は、事実上付け難い。故に便宜上、これらはすべて「大本」として扱う。（拙論四五八頁）

㈢、『傾城禁短気』をはじめとするいくつかの作品は、半紙本を横向きに綴じた形の変則的な装訂になっている。これを「横綴半紙本」と呼んで、美濃二ツ切横本、所謂枕本の類と区別する。（拙論四五九頁）

凡　例

一、書誌記述は、所見本中最善本と思う原刊本を採って(A)とし

て標出し、その下に目録事項、書誌、丁付、挿画、印記、備考、所在、補説、と項を分って解題する。備考欄には、保存の良否、版式上の問題点、所附の広告・副題等を録す。

一、後印本、後修本（改題本、改竄本）等については、その条下に別に(B)(C)等の一項を立てて、同様の要領で著録する。この際、(A)と同じ事は省略し、相異点（修板箇所、印行者等）は之を明記する。

一、（所在）の項には、諸本のごく大要を（　）内に録す。未見本については原則として最終項目に配する。

一、所掲本の排列は、原刊本の刊行年次順に従い、後印・後修本はすべてその原刊時の項目下に収める。

一、標出書題は目録題を以てする。八文字屋刊本に於ては本文巻頭に内題を存しないからである。

一、記述事項中〔　〕で括った所は、推定事項を意味する。作者については、序文に署名のある場合、たとえば「自笑」の名があれば「題八文字自笑作」とし、別に代作者が推定されるような場合は、その下に〔江島其磧〕作、等とした。作者推定は長谷川強氏の「浮世草子の研究」に主として拠り、尚、藤井乙男氏「浮世草子名作集」解題、中村幸彦氏「其磧自笑確執時代」（「近世小説史の研究」所収）、篠原進氏「未練と八文字屋」（弘前学院大学紀要十七）等を参照した。

一、寸法は、タテ×ヨコの順に記し、匡郭寸法は、第一巻本文第一丁表に於て内法を計測する。

一、行数は、毎半葉当りの行数を記す。

一、所蔵者は略記することがある。

一、印記については、旧蔵者のもののみを録し、現蔵者の印は原則として之を略す。又、旧蔵者印でも、不明確な貸本屋小印等は多く之を略した。

一、漢字は印刷の都合上、原則として新字体に拠ったが、一部旧体を残した所もある。藝、證、萬、などである。

本調査に際しては、東京大学、京都大学、天理図書館はじめ御所蔵者関係諸機関各位より、種々の御高配を忝くした。右各位の寛大なる御配慮がなければ、本調査の如きは、その一歩を進み得なかったであろうことを思うて、ここに改めて厚く御礼を申しあげる。

又、本稿は、長谷川強氏の「浮世草子の研究」より学恩を蒙る事、まことに甚大なるものがある。長谷川氏からは、色々と御指正御指導を賜った事と併せ、深謝申し上げる。

阿部隆一先生には、公私に亘り、暖かな御指導、御励ましを賜った。在天の先生に、心より御礼を申し上げる。

(1)(A) けいせい色三味線　　国会図書館蔵

五巻　〔江嶋其磧〕作　元禄十四年八月刊（京　八文字屋八左衛門）　横二ツ切五冊

浅葱色無地原表紙（上に帝国図書館の渋引覆表紙）。巻二・三のみ原題簽（隅入双辺「けいせい色三味線　幾之巻」、外題左右に副題を小字に刻す、備考参照）。寸法十二・三×十八・二糎。序一丁（年記・署名なし）。序題「けいせい色三味線」。各巻首に目録一丁。目録題序題に同。但、巻五のみルビ「いろじやみせん」。各巻首女郎名寄附綴（備考参照）。巻立、京・江戸・大坂・鄙・湊。四周単辺。無界。匡郭寸法十一・〇糎×十七・〇糎。十五行。挿画セリフ附刻。板心左の如し。

京之巻	色三味線	○丁
江之巻	色三味線	○丁
大之巻	色三味線	○丁
岡之巻	色三味線	○丁
海之巻	色三味線	○丁

（巻五末奥附左の通り。）

色三味線終　扨申上まする

好色一代曾我　八巻

付り十郎と虎が石より

かたい契約

并ニ五郎と口舌の泪は

少将の夜の雨

右之本来春早々出し申候

御しらせのためこゝにしるす

元禄十四年八月吉日

ふ屋町通せいくはんじ下ル町　八文字屋八左衛門板

（丁付）(一)序「序」目録「初口」名寄「名三」―「名九」本文「三」―「廿ノ卅」―「六十三」(二)目録「初口」名寄「名三」―「名十五」本文「三」―「廿ノ卅」―「初卅三」「後卅三」―「五十五」(三)目録「初口」名寄「名三」―「名十三」本文「三」―「廿一ノ卅」―「五十五」(四)目録「初口」名寄「名三」―「名七」本文「三」―「廿ノ卅」―「卅九」(五)目録「初口」名寄「名三」―「名六」本文「三」―「廿ノ卅」―「卅九」

（挿画）(一)五ウ六オ、十一オ、十六ウ十七オ、卅二オ、卅七ウ卅八オ、四十二オ、四十七ウ四十八オ、五十三オ、五十八ウ五十九オ。(二)五ウ六オ、九オ、十三ウ十四オ、十八ウ十九オ、卅四ウ卅五オ、四十オ、四十五ウ四十六オ、五十オ。(三)五ウ六オ、十ウ十一オ、十四オ、十八ウ十九オ、卅三ウ卅四オ、卅九オ、四十四ウ四十五オ、五十ウ五十一オ。(四)五ウ六オ、十一ウ十二オ、十八ウ十九オ、卅五ウ卅六オ。(五)五ウ六オ、十二オ、十七ウ十八オ、卅三ウ卅四オ、卅八オ

（印記）「東京図書館蔵」方形朱印。

（備考）外題傍記副題左の通り。
㈠色に我をおる嶋原狂ひの□／└─不─明─┘（天理蔵本による。）
㈡恋も情もよし原に／かよふしのびごま（国会蔵本）
㈢思わくは真実しん町に／こがるゝあしわけ舟（同右）
㈣情は京まさり／姿は鄙の色里（天理蔵本）
㈤色にうき名の立浪／打よする恋の湊（吉田幸一氏蔵本）
本書は、巻一～巻四は印面の美しい極早印の本であるが、巻五の本文はずっと後印本の配補。但し奥附は初印時の者を配す。外に、巻一の五ウ（挿画右半面）半丁欠。初印の所見本は本書のみにして、初印の完本未見。
（所在）リチャード・レイン氏の「英国に於ける元禄文学」（西鶴研究第六集）所掲のケンブリッジ大蔵本は「元禄十四年」となっているから、或いはこれか。未見につき詳細は未詳。

(B) 同　　吉田幸一氏蔵
同〔元禄十四年八月〕刊同十五年二月修（同）横二ツ切五冊
黒色無地表紙原装。巻三・四のみ原題簽。寸法十二・三×十八・七糎。以下版式等(A)に同。一部板木修訂等につきては備考参照。刊記（奥附）原刊本奥附と同板にして一部入木修訂。左の通り。（。印が入木の所）
右之本来春早々→右之本追付早々
元禄十四年八月→元禄十五年二月
（備考）刊記の外、大坂の巻の名寄の板木に大幅な修訂がある。詳細は長谷川強氏「浮世草子の研究」P90～P95参照。但、「名四」の丁のみは、変更が頗る大幅の為、覆せ刻の別板を起し、板下切継によって修訂。京・江戸両巻には修なし。鄙の巻「名三ウ」終行の「壱匁」の下「も有五分ノも有」とありし七字削除。湊の巻に就ては初印本未見につき不明。吉田氏蔵本は印面尚清爽にして国会本と殆ど遜色なし。但、巻一・二と、巻三・四・五とは、別印本の配補。両者共刷印保存並に善美。
（所在）東大霞亭（改装。印記「中井文庫」「大槻蔵書」「羽州神山増戸蔵書」等。五冊）。天理（改装。印記「広瀬文庫」等。五冊）。赤木文庫（黒無地表紙原装。原題簽。五冊）。都立中央加賀文庫（改装。印記「好文堂」等。印面は甚しく損耗を生じており、最も後印の一本と見ゆ。五冊）。東洋文庫岩崎（改装。巻二～四原題簽保存。五冊。比較的早印。東洋文庫刊岩崎文庫貴重本叢刊に影印。）。早大図書館（改装。巻一及五のみ原題簽。ただし巻一貼付の題簽は巻二〈江戸〉のそれ。印記「待賈堂」「江戸四日市古今珍書僧達摩屋五一」「斎藤文庫」「幸堂私印」等。五冊。）
（補記）本書巻立は、東大霞亭、東洋文庫、早大、の各本は「京―大坂―江戸―鄙―湊」の順に配してあるが、正しくは「京―江戸―大坂―」の順たるべき事、天理蔵本の原題簽の巻附や版心の様式によって知れる。尚、本書の直接の祖型たる「役者口三味線」も「京―江戸―大坂」の順の三巻本。
尚、(B)の修印本各本の内、吉田氏蔵本最も早印。東洋文庫・早大蔵本之に次ぎ、加賀文庫蔵本最も後印。江戸後期に下る印

本かと思われる。国書総目録によれば、東北大狩野文庫に(A)の一本が著録されているが、現在所在不明の由にて未見。又、江戸川乱歩氏旧蔵本（二種）、果園文庫旧蔵本、並に未見。

本書は、明和九年刊の『遣放三番続』や、安永二年刊『役者一陽来』の巻末の八文字屋の蔵板目録に所掲であるから、明和の売板に際して売られなかったものである。（『役者一陽来』に就ては長谷川氏年表を参照した）。加賀文庫蔵本の如き、甚しい後印本が、末期の八文字屋から刷出されたものか、他店に流出して刷られたものかは未詳。

(2) 大尽三ツ盃（だいじんみつさかづき）　天理図書館蔵

存二巻〔江嶋其磧〕作〔宝永元年九月頃〕刊（〔京八文字屋八左衛門〕）横二ツ切二冊

薄墨色卍字繋唐草紋空押行成表紙〔改装〕。後補書題簽。寸法、十三・三糎×十八・五糎。巻首欠丁。〔京〕之巻巻首役者評判五丁。江戸・大坂之巻巻首目録一丁。目録題「大尽三ツ盃（だいじんみつさかづき）」、江戸四芝居役者惣目録六丁、大坂四芝居惣役者目録評判四丁。内題なし。四周単辺。無界。十五行。匡郭寸法十一×十六・六糎。板心左の如し。

一之巻	三ツ盃	○丁
二之巻	三ツ盃	○丁

跋・刊記等欠巻につき未詳。巻二尾欠。

（丁付）㈠（首欠）「四」―「八ノ十四」―「廿ノ卅」―「四十七」現存28丁。㈡首目「一」―「十」本文「六」―「廿ノ卅」―「卅三」現存28丁。

（挿画）㈠十六ウ十七オ、廿ノ卅ウ卅一オ、卅四ウ卅五オ、卅八ウ卅九オ、四十三ウ四十四オ、㈡八ウ九オ、十二ウ十三オ、十六ウ十七オ、卅一ウ卅二オ。

（印記）「斑山文庫」「水谷文庫」等。

（備考）巻一首及び巻末、並に巻二江戸評判目録末に水谷不倒氏の識語箋を貼る。所掲の評判記の内物故者の名と、開口中の「甲さる」の文言より、本書を宝永二年正月刊かと推定されたるもの。尚、長谷川強氏は「浮世草子の研究」P211に於て宝永元年九月頃刊かと推定さる。今之に従う。高野辰之旧蔵。

(3)(A) 風流曲三味線　東大霞亭文庫蔵

六巻〔江嶋其磧〕作　宝永三年七月刊（京　八文字屋八左衛門）横二ツ切六冊（但、巻一後印本配補）

縹色無地表紙改装。後補書題簽。寸法、十二・四×十八・四糎。序なし。目録一丁、目録題「風流曲三味線（ふうりうきよくじやみせん）」。四周単辺。無界。匡郭寸法十・六×十六・九糎。十五行。板心八文字屋様式。巻標黒格。柱刻「幾之巻一曲三味線　○（丁）」。挿画セリフ附刻。尾題なし。各巻尾に「京初巻終」「二巻終」「三ノ巻終」「四ノ巻終」「五之巻終」「六巻終」。奥附左の如し。

扨申上ます
并ニ好色一代訛牢人（やさらうにん）

当世御伽曾我　八巻

付リ風流東鑑

十郎と虎が石より
かたい契約
五郎と口舌の泪は
少将の夜ルの雨
粋は知ル今様姿
色里三ケの秘伝

右之本追付出し申候御しらせのため
こゝにしるす

宝永三年戊七月吉日
ふ屋町通せいぐはんじ下ル町　八文字屋
八左衛門板

(丁付) (一)目録「初口一ノ四」本文「五」—「廿ノ卅」—「五十五」(卅五ウ欠丁) 全42丁。(二)目録「初口一ノ四」「五」—「廿ノ卅」—「六十」全47丁。(三)目録「初口一ノ四」「五」—「初ノ廿」「又廿ノ卅」—「四十八」全36丁。(四)目録「初口一ノ四」「五」—「廿ノ卅」—「五十四」全41丁。(五)目録「初口一ノ四」「五」—「廿ノ卅」—「五十三」全40丁。(六)目録「初口一ノ四」「五」—「廿ノ卅」—「五十」及び奥附半丁。全37丁半。

(挿画) (一)七ウ八オ、十二ウ十三オ、十七ウ十八オ、卅四ウ卅五オ、四十一ウ四十二オ、四十八ウ四十九オ、五十三オ。(二)八ウ九オ、十四ウ十五オ、卅一ウ卅二オ、卅八ウ卅九オ、四十五ウ四十六オ、五十一ウ五十二オ、五十六ウ五十七オ。(三)七ウ八オ、十三ウ十四オ、十九ウ初ノ廿オ、卅五オ、四十オ、四十五ウ四十六オ。(四)七ウ八オ、十二オ、十七ウ十八オ、卅四ウ卅五オ、四十一ウ四十二オ、四十九ウ五十オ。(五)八ウ九オ、十五オ、卅一オ、卅七ウ卅八オ、四十四ウ四十五オ。(六)七ウ八オ、十三ウ十四オ、廿ノ卅ウ卅一オ、卅七ウ卅八オ、四十三ウ四十四オ、四十九オ。

(印記)「霞亭文庫」長方形朱印等。

(備考) 全巻初印の本未見。本書も原刊記を保存するも、尚幾分磨損あり。既に相当部数刷り立てられたる後の本と見ゆ。但早印。巻一のみは、下述の天理蔵本などより遙かに下る後印本の配補。

(所在) 広島大国文学研究室（改装。奥附欠。巻一—五は、所見本中の最早印の善本。但、巻六のみは天理蔵本と同等の後印本配補。六冊）都立中央特別買上文庫441（存巻一—四、四冊の内、巻三のみ極早印本の配補。余は後印、印記「蜂屋文庫」。合一冊）。香川大神原（存巻五。一冊。破損甚）

(B) 同　　天理図書館蔵

同　〔同〕作　宝永三年七月刊　宝永七年閏八月〔以後〕

印　（京　八文字屋八左衛門）　同六冊

黒色卍字繋石畳紋空押行成表紙改装。後補書題簽。寸法十二・四×十八・四糎。匡郭寸法十・七×十七・一糎。版式(A)に同。奥附に一部修訂を加う。即ち左の如し。

右之本　　出し申候御しらせのため

こゝにしるす

宝永七年閏八月吉日

ふ屋町通せいぐはんじ下ル町　八文字屋八左衛門板

右の本字下「追付」の二字を削去し刊年記の「二」「戌七」を各「七」「閏八」に入木修訂してある。その外「扨申上まする」の上に▲印を入木。但しこの奥附板木は、京大国文研蔵『けいせい伝受紙子』巻末に流用されてあり、その時に入木修訂せられたもので、本書(B)の奥附は、その再流用である。然し、『けいせい伝受紙子』の其に於ては、「追付」は削去していないから、この二字は再流用に当って削られたものと見える。すると或いは『当世御伽曾我』刊行（正徳三年）以後印か。

（印記）「杏露」等。

（所在）早大図書館（改装合綴一冊本。改装時に奥附を脱したるものか。印面は天理本と同等。印記「梅園所庫」「斎藤文庫」「幸堂私印」等。）東博（未見。国書総目録を見るに(B)か）

(C)　同　　東北大狩野文庫蔵

同　〔同〕作　宝永三年七月刊〔後印〕　同六冊

利久鼠色無地表紙原装。（巻五のみ改装）原題簽。寸法十二・八×十八・八糎。版式等(A)に同（同版）匡郭寸法十・七×十六・八糎。無刊記。

（備考）原装本なるも奥附なし。この奥附無き者は、かなり下る後印本にして磨損顕著。(A)(B)の諸本はいずれも改装にして原題簽を欠く故、(C)諸本の原題簽を以て各巻外題傍副題を左に補記す。（題簽は隅入双辺。外題「風流曲三味線　幾之巻」）左記（　）内は所拠の底本。

（副題）㈠一度はさかりを見せる／花の都に白笹（しら）大臣（東北大）㈡□水の出はな／□屋の色にしみつく男（赤木・都立加賀）㈢両大臣こかねの力くらへ／松を引ぬく難波の兵（つはもの）（吉田幸一氏）㈣情の掛あきない藝子に／縁をむすぶの紙見せ（同上）㈤宝は身のさし合せ／時の間にあふ金の鶏（赤木・吉田氏）㈥武蔵野のつき出し女郎／花に水うつ□跡（東北大）

尚、東北大蔵本は巻五のみは改装の早印本を配補せるもので、それが(A)(B)の何れなるかは分らない。

（所在）慶大図書館（改装二冊合綴本。）東洋文庫岩崎（淡縹色無地原表紙、後補書題簽、巻三のみ僅かに早印かと見ゆる別印本の配補、巻三書型稍大なり。六冊）。都立中央加賀（改装三冊合綴本、但原題簽を遊紙に貼付、印記「好文堂」）。都立中央特別買上（改装。巻五六欠。巻一二(C)後印、巻三(A)早印、巻四(C)後印別行本の三種取合本。印記「蜂屋文庫」等）。吉田幸一氏（巻一二五六は縹色無地原表紙、巻三四は黒色無地原表紙を附せる別印本取合。巻一三四五に原題簽。いずれも(C)後印本。印記「ヒラデ記」「広瀬文庫」等。六冊）。赤木文庫（縹色無地原装。巻二～五原題簽。印記「江戸四日市古今珍書會達摩屋五一」「待賈堂」。横山氏歿後所在未詳。六冊）

右の外、国書総目録には、東京博物館、北大、京大（巻六、一冊）、江戸川乱歩氏、果園文庫、学書言志（巻四、一冊）の各本を著録するも並に未見。右の京大とあるは、国文学研究室

蔵本なれど、館外帯出中の由で見る事が出来なかった。その外、リチャード・レイン氏の「英国に於ける元禄文学」（以下「レイン氏報告」と略記する。）には、ケンブリッジ大蔵本として「風流曲三味線、二部あり　宝永三年か」とある。按ずるに無刊記後印本でもあろうか。未見につき詳細未詳。

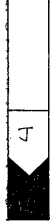
参みに、国書総目録記載の翻刻本の外、明治二十五年刊、尾崎紅葉校閲の活版和装本有り。（半紙本一冊、東京、両輪堂、文園堂）

なお長谷川氏の年表によれば、本書は安永二年刊『役者一陽来』巻末の八文字屋蔵板目録に所載の由であるから、この頃までは八文字屋に蔵板していたのである。ただし、それ以後流出したかどうかは未詳。今この(C)が、そのいずれの時点の後印本であるか、明確には分らない。

(4)(A)　遊女懐中洗濯　　蓬左文庫蔵

〔五巻〕〔江嶋其磧〕作　〔享保六年秋序〕刊　〔京　八文字屋八左衛門〕　存巻四　半紙二ツ切横本一冊

黒無地表紙（原装カ）。後補書題簽。寸法十一・〇×十五・九糎。巻首目録一丁。目録題「遊女懐中洗濯」。遊女名寄、伏見撞木町、大津柴屋町、奈良木辻町、各二丁宛。内題なし。四周単辺。無界。匡郭寸法、九・四×十四・六糎。十五行。板心左の通り。



但、第廿三丁のみ巻標無し。尾題なし。刊記等欠巻につき不明。

（丁付）目録「初口」名寄「一」―「初六」本文「六」―「十ノ廿」―「卅八」全30丁。

（挿画）八ウ九オ、廿六ウ廿七オ、卅三ウ卅四オ。

（備考）やゝツカレ本なれど印面は鮮新。

（所在）現在迄完本の存在は知られない。大阪大学忍頂寺文庫蔵の一本は巻二（江戸之巻）のみの端本。筆者未見なれど大沼晴暉氏の調査によると左の如し。

横一冊紺表紙。題簽欠。寸法十・三×十五・六糎。巻首目録一丁（目録題蓬左蔵本に同じ）。「江戸吉原女郎新名よせ」七丁。内題なし。四周単辺。無界。十五行。板心左の通り。

（丁付）目録「初口」名寄「一」―「初七」本文「七」―「十ノ廿」―「四十一」（但最終丁裏表紙見返貼付にして手擦甚しき故丁付読めず。全35丁。

（挿画）八ウ九オ、廿五ウ廿六オ、卅一オ、卅七ウ卅八オ。

（備考）裏打修補済。

右の外、南木文庫に巻二・三の端本が存する由なれど未見。又長谷川強氏示教では、南木文庫本を転写せる近写本を野間光辰氏が御所蔵の由なれど並に未見。故に全五巻の内巻二三四の三巻が人間に伝存せるものならん。国書総目録によれば江戸川乱歩氏蔵の巻三（大坂之巻）の端本もあるらしいが未見。

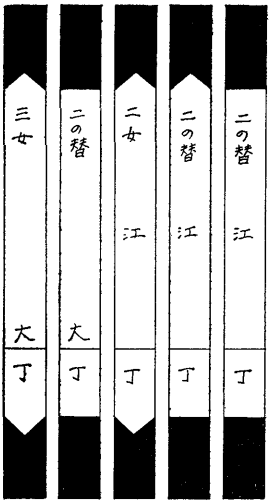
（補説）本書版心は、残存巻より見るに、前三巻は、「京、江、大」の文字を以て巻標となし、後二巻は黒格を以て巻標となせるものらしい。尚、長谷川強氏は浮世草子年表に宝永六年の自笑署名序文ある事を報じておられるが、示教では後の通修改題改竄本『けいせい卵子酒』所附の序文を以て本書の其と推定してかく書かれた由で、原刊本として序文の存する者は未だ存在が知られない。

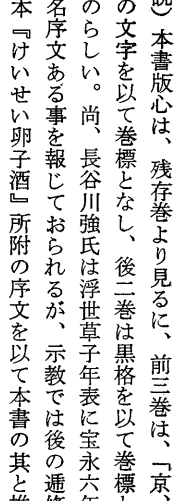
(B) 野傾髪透油　　東大図書館蔵

三巻　題八文字自笑作〔江嶋其磧〕作　〔宝永六序〕刊

享保二年四月改題修印（改竄）（京　八文字屋八左衛門）半紙二ツ切横本三冊

香色無地表紙原装。原題簽（隅入双辺、外題㈠武蔵野ゝ月額㈡難波江の水櫛㈢九重の花髪）。寸法（江戸・京）十一・一×十六・二糎（大坂）十一・一×十六・三糎。序なし。各巻頭目録一丁。目録題「野傾髪透油」。各巻目録の次に役者名寄、江戸三丁、大坂三丁、京四丁。内題なし。版式(A)に同様。但し板心は左の通り。





㈠(ア)目録、七―廿二、(イ)三―六、(ウ)廿三以下、㈡(エ)目録―廿二、(オ)廿三以下、㈡(カ)目録、七―廿八、(キ)名寄、(ク)廿九以下。

尾題なし。刊記左の通り。（京ノ終丁奥に）

享保二年酉卯月吉日八文字屋八左衛門板

又、江戸の巻大坂の巻各巻末一行を入木して修し「八文字屋八左衛門板」と附刻。京の巻巻末に左の如く広告を附す。

▲お断申上まする

并ニ母はお針に子は色里に

野傾咲分色孖　全部五巻

付リ父は他国に子は野郎屋に

右の本五七日中ニ出し申候尤よみ本さしあひなし

好女談合柱　全部三巻

付リ陽気の頭上ニ根も葉もなふて花の咲智恵

并ニ深取ってあさふ渡る恋の海の藻刈分別

右ハ西川筆好色本当月中ニ出し申候

絵入武徳鎌倉旧記　全部廿五巻

右は馬場信意著述

当月中ニ本出来申候

各々様　　八文字屋　八左衞門

本書巻立に就ては、京の巻に刊記を附し、更に、江戸の巻名寄の末に「作者八文字／自笑（印）」と刻せるは序に代えたる意なるべし。即ち、「江戸」―「大坂」―「京」、と巻立を変更して、巻頭だけ見ると新刻書の如く見ゆる様画策せるものなるべし。

（丁付）㈠（江戸）「二」―「五ノ六」―「十ノ十三」―「四十一」全36丁。㈡（大坂）「三」―「十九廿」―「四十」全37丁。㈢（京）「二」―「廿ノ廿七」―「四十五」及び巻末奥附広告半丁。計38丁。

（挿画）㈠（江戸）八ウ九オ、十七ウ十八オ、廿五ウ廿六オ、卅一オ、卅七ウ卅八オ、㈡（大坂）八ウ九オ、十四ウ十五オ、廿五ウ廿六オ、卅オ、卅六ウ卅七オ、㈢（京）八ウ九オ、十四ウ十五オ、卅ウ卅一オ、卅八ウ卅九オ。

（備考）江戸の巻『遊女懐中洗濯』と本書とを比較の結果は次の通り。

本書巻頭～「廿二」は新刻。「廿三」～終丁は『遊女懐中洗濯』の板木を使用。このため廿二ウ「恋の出花さん茶にのどをかはかす男」の章の書出し六行を三行に縮約して廿三オにうまく接続するよう改竄。

右の事実から類推するに、京・大坂の両巻にあっても板心に「二の替」と刻せる丁は改題に際しての新刻板木と思われる。尚、『懐中洗濯』巻四（鄙）は『髪透油』には用いられていない。役者評判記の性格上、巻四五は等閑に附されたものであろう。

（所在）早大演博（改装本。印記「対梅宇主萩原乙彦蔵于俳書二酉精舎」「伊原蔵印」。三冊。）この外、国書総目録によれば芸大と天理に所蔵と著録。芸大蔵本未見。天理蔵とあるは、国書総目録の誤録にして所蔵せず。

Ⓒ　けいせい卵子酒　　天理図書館蔵

五巻　題八文字自笑作〔江嶋其磧〕作　宝永六年序刊

享保七年正月再改題遁修（再改鼠）（京　八文字屋八左衞門）　美濃二ツ切横本合一冊。

香色無地表紙〔原装〕。題簽欠。寸法十二・一×十七・九糎。巻首序文一丁（備考参照。仮に序Ⓐとす。）。序末に「宝永六のとしの秋／作者／八文字／自笑㊞（鼎形に亀字）」。目録一丁（各巻）目録題「けいせい卵子酒」。本文第一章は又「序」と題して発端を述ぶ（仮に序Ⓑとす。四丁）。内題なし。四周単辺。無界。匡郭寸法九・五×十四・八糎。序Ⓐ12行、序Ⓑ14行、本文15行。板心左の如し。

㈠　一女　丁

㈡　二女　江　丁

㈢　三女　大　丁

㈣　四女　丁

(五)

但、(一)の序Ⓐ丁は上黒口■の如く、序Ⓑ丁は上下共黒口■。又本文「十三ノ八」の丁は下黒口■。又巻三の「廿四ノ七」下黒口■。巻四の「廿三」巻標なし。巻五目録は上下共黒口■。同巻「六ノ十五」「十六」は巻標横細線に刻し、「十七」は巻標なし。以上の通り板心破格がある。その多くは修板の痕跡なり。刊記、左の如し（巻五終丁）

享保七年寅ノ正月吉日　作者八文字屋自笑㊞（鼎型に亀字）　八文字屋八左衛門板

(丁付)(一)序Ⓐ「初」目録「口」序Ⓑより通し丁付にて「三」―「六ノ十」―「十三ノ八」―「三十二」全23丁。(二)目録「初口」本文「三」―「六ノ十」―「三十一」全26丁。(三)目録「初口二」本文「三」―「六ノ十」―「廿四ノ七」―「三十」全22丁。(四)目録「初口」本文「二」(丁付「三」なし)「四」―「七ノ十一」―「廿八」全23丁。(五)目録「初口」本文「三」―「六ノ十五」―「廿九」「十」(終丁)全21丁。

(印記)「松坂日野町、本屋兵助」「兎角菴」等。即ち果園文庫旧蔵本。

(備考)各巻の改竄は次の通り。

(一)京

懐中洗濯	髪透油	卵子酒
〔序〕	除去	序Ⓐ
〔目録〕	↓新刻	↓〔再新刻〕
〔遊女名寄〕	↓役者目録	↓除去
	〈一〉役者評判記	↓除去
		〈一〉序Ⓑ（新刻）
〈一〉〔身請ハ余所ニ…〕	↓除去	↓〈二〉〔板木再用、但章首四行入木改竄修訂。〕
〈二〉〔巴なみの紋日…〕	↓〈二〉〔同（章首二行改竄修訂）〕	↓〈三〉同板（章首六行再改竄入木により逓修）
〈三〉〔俄雨ハ傘の…〕	↓〈三〉〔同〕	↓〈四〉同板
〈四〉〔かいる口ゆへ…〕	↓〈四〉〔同〕	↓〈五〉同板
〈五〉〔喜見城のたのしみ…〕	↓〈五〉〔同〕	↓除去

（京の巻は「懐中洗濯」伝本未見故該書については推定。）

㈡江戸	目録	新刻
	遊女名寄	↓役者目録
	〈一〉女郎をちょっと…	↓除去
	〈二〉恋の出花…	↓〈二〉同板（但、章首六行改竄）
	〈三〉以下	↓同板（但、〈五〉の終行一行入木して修し、下部に「八文字屋八左衛門板」と加刻。）
		「懐中洗濯」に同板。目録題のみ入木修訂。
		↓除去
		↓除去
		↓〈一〉同板木再用（但、本文巻頭一丁のみ覆セ刻による異板）
		↓〈二〉「懐中洗濯」の板木に戻す。以下同板。
		↓同板
		書肆名删去。
㈢大坂	〔目録〕	↓新刻
	〔名寄〕	↓役者目録
		〈一〉役者評判記
	〈一〉〔伯父が甥の恋草…〕	↓除去
	〈二〉〔女良を口先で…〕	↓〈二〉〔同板カ〕
	〈三〉〔誓紙の罰あたり…〕	↓〈三〉〔同板カ〕
	〈四〉〔あげやの仏は…〕	↓〈四〉〔同板カ〕
	〈五〉〔足もとを見る…〕	↓〈五〉〔同板カ〕
	この巻は「懐中洗濯」原本未見ゆえ、章題等すべて推定。	〔巻末の一行を入木して修し「八
		↓「懐中洗濯」の板木再用か或はカブセによる新刻か不明。
		↓除去
		↓除去
		↓〈一〉〔「懐中洗濯」の板木再用カ〕
		↓〈二〉同板（板心丁付のみ修す）（「廿」ノ字を「十」に訂す。）
		↓〈三〉同板（　〃　）
		↓〈四〉同板（板心丁付を修せる外、「髪透油」「卅四」一丁分を三行に要約して、次ノ丁〈丁付廿四ノ七〉の首三行分に埋木して修す。
		↓〈五〉同板（板心丁付を入木修訂せる外、「髪透油」の卅六・卅七・卅八〈内卅六ウ・卅七オはさし絵〉三丁分を四行に要約して、次丁〈丁付「廿八」〉の首四行に埋木修訂。
		↓書肆名删去

文字屋八左衛門板」と加刻〕		
目録	（この巻無し。）	↓覆せ刻
名寄		↓除去
〈一〉金を打込鐘木町…		↓〈一〉同（但、巻首〈丁付「六」〉一丁覆せ刻。以下同板にして、板心丁付のみ埋木修訂。）
〈二〉二人が思入レ…		↓〈二〉同（「懐中洗濯」の「廿二」一丁分を二行に要約して次ノ丁〈丁付「十三」〉の首二行に埋木修訂。その他は同板にして板心丁付のみ修訂。）
〈三〉木辻の女郎に…		↓〈三〉同（同板）
〈四〉ふかき遊を…		↓〈四〉同（同板）
〈五〉つい吸付た乳守の色里		↓〈五〉同（同板）
〈未見〉	この巻なし	左に別記す

(四)鄙

(五)

巻五については、次の如く板木を流用している。

①第二「衆道女道先陣後陣の二つ詰」十八ウ八行目から廿二ウ八行目迄は、『役者口三味線』大坂の巻六十七ウ～七十一ウの板木を流用し、十八ウ前七行と廿二ウ九行目以下は板木切継によって別文を補入し一話の体裁を整えている。

②第五「内証の悪性見へすく障子紙」廿六ウ四行目から廿九ウ四行目までは同『役者口三味線』京の巻五十八ウ～六十一ウの板木を流用し、廿六ウ前三行と廿九ウ五行目以下は板木を切継して修し、尚『卵子酒』終丁は新たに一板を起して続け、一話の体裁を整えている。

③本書十八オの挿画は、同『口三味線』大坂の巻六十七オの挿画板木を流用、その際、画中の名書きを削去し、絵や文句を埋木して巧みに修正している。

④本書廿六オの挿画も同『口三味線』京の巻五十八オの挿画板木を同様にして流用したもの。この③④は、①②の流用に伴って生じたもの。

以上の外、浮世草紙刊行会「浮世草子」所収『男色藁人形帰り新座』と題された書は、現在迄刊本の所伝が知られず、刊本より転写せる一本を底本として翻刻されたものであるが、解題では「宝永六年写」とし、尚、巻尾に「宝永五年九月吉日」とある。この書と、『けいせい卵子酒』巻五とを比較するに

(1)男色藁人形帰り新座→『卵子酒』五ノ一『好色藁人形帰り新座』に同文

(2)藝子にうつす俤の名よせ→『卵子酒』になし。

(3)床の仕掛秘密の一言→『卵子酒』になし。但『役者口三味線』京の巻開口の改竄。

(4)衆道女先陣後陣の二つ詰→『卵子酒』五ノ二「衆道女道先陣後陣の二つ詰」に同文。『口三味線』大坂ノ巻開口の改竄。

(5)二軒茶屋の腰掛酒極意の噂→『卵子酒』五ノ三同題章に同文。

(6)内証の悪性見えすく障子紙→『卵子酒』五ノ四「内証の悪性見へすく障子紙」に同文。『口三味線』京ノ巻開口の改竄。

以上の結果よりみるに、『卵子酒』の巻五は右の『帰り新座』と題された一書（本来は別の外題があったに違いない）の板木を流用したものと覚しく、しかもそれがまた、先行の役者評判記の改竄修印本であるらしいと思われるから、この巻五のみは、『遊女懐中洗濯』とは無関係の伝系をもつ、宝永以前刊評判記の再改題遡修板木の組合せと見える。ただし、何分『帰り新座』の刊本が未見であるから、詳らかな経緯は今のところ分らない。

これに就て長谷川強氏は「浮世草子の研究」二百十二頁に、絵入狂言本『厳嶋姫滝』所掲の予告文「第五男色十界図野郎自前の棚おろし」を引いて、『懐中洗濯』にあっても巻五は野郎を扱ったものかと推定された。又、それ以前に、藤井乙男博士は「浮世草子名作集」の解題にこの辺りを考察されている。

尚『帰り新座』が宝永五年の成立とすれば、或いは『懐中洗濯』の巻五が、既にこの『帰り新座』の再改竄本であった可能性も全くないとはいえぬことになる。結局、この辺りの消息は原本の出現に俟つの外ない。

（所在）東北大狩野（改装。序Ⓐ欠。合一冊）。他に、レイン氏報告に、ケンブリッジ大蔵本として「傾城卵子酒、序宝永六年、奥附享保七年」とあるが未見。

(5)(A) 野白内証鑑　　国会図書館蔵

存巻一～四（五巻ノ内）　題八文字自笑作〔江嶋其磧〕

作　宝永七年秋序刊　（京　八文字屋八左衛門）　横二ツ切四冊

黒無地表紙〔原表紙〕、巻二のみ原題簽。（隅入双辺、外題「諸色見通」野白内證鑑　二之巻」外題右副題「色道ひみつ」左副題「あいきやうの占」(B)備考参照）。寸法十二・五×十八・五糎。巻頭序二丁。序末左の通り。

宝永七ッのとしの秋

作者八文字自笑㊞（鼎形に亀字）

各巻頭目録一丁。目録題「野白内證鑑」。四周単辺。匡郭寸法

十・九×十六・八糎。無界。十五行。板心八文字屋様式、巻標黒格。柱刻「幾之巻一内證　○（丁）」。挿画セリフ附刻。尾題なし。各巻末「一之巻終」巻二（破損不明）「三之巻終」「四之巻終」巻五欠巻。(B)都立中央加賀文庫蔵本に於ては「二ノ巻終」「五ノ巻終」）巻五欠巻につき刊記不明。各巻尾広告等につきては備考参照。

（丁付）㈠序目録「初一」―「初三」本文「一」―「廿ノ卅」―「五十二」全45丁。㈡目録「初口」本文「三」―「廿ノ卅」―「四十九終」全38丁。㈢目録「初口」本文「三」―「廿ノ卅」―「五十一」全40丁。㈣目録「初口」本文「三」―「廿ノ卅」―「四十八」全37丁。(五)目録「初口」本文「三」―「廿ノ卅」―「四十九」全38丁。本巻は国会本欠巻につき東大霞亭蔵本を以て補う。）

（挿画）㈠九ウ十オ、十六ウ十七オ、卅三ウ卅四オ、四十ウ四十一オ、四十八ウ四十九オ。㈡五ウ六オ、十三ウ十四オ、廿ノ卅ウ卅一オ、卅七ウ卅八オ、四十四ウ四十五オ。㈢五ウ六オ、十二ウ十三オ、廿ノ卅ウ卅一オ、卅九ウ四十十オ、四十七ウ四十八オ。㈣五ウ六オ、十二ウ十三オ、十九ウ廿ノ卅オ、卅六ウ卅七オ、四十四ウ四十五オ。(五)五ウ六オ、十二ウ十三オ、十九ウ廿ノ卅オ、卅七ウ卅八オ、四十五ウ四十六オ。欠巻に付霞亭本を以て補う。）以上各巻見開挿画五面宛。

（印記）「帝国図書館蔵」のみ。

（備考）印面の頗る鮮かな初印本。保存も良好な善本であるが巻五を欠くのが惜しまれる。後述の如く、本書は大幅に覆せ刻の補刻丁を交えた後修本が多く、原刻本は巻一～四については国会蔵本のみ存し、巻五については、東大霞亭蔵本（巻五のみ原刻本配補）の一本が現在迄に発見出来たに過ぎない。

各巻巻末広告次の通り。

（巻一奥附）

▲皆様へお断申上まする・伝受紙子の本当春
出し申筈ニ候へ共・替りし趣向思ひ付それゆへ延引ニ
罷成候・ちがいなく五七日の内ニ本出し申ゆへ書印候
并ニ太平記細石巌となる思ひの念力

傾城伝受紙子　全部五巻
付り血判は四十八牧の紙子の火打討たり敵

第一不禮講　付りぶ奉公の罪は重が上の小夜衣
相手のさする役目のぶ沙汰

第二吝気講　付り我妻ならぬ方便の重妻
相手の持す女房の妬心

第三仁義講　付り遣はくどからぬ浅黄袴
相手は残るうらみの黄泉

第四禮知講　付りうはべは浮気内心は堅い石垣町
相手の心引見る色遊び

第五武勇講　付り袖印相図の武道具四十八色
相手は知ぬ夜ルの臥〔床〕

右の本御もとめ御覧可ヒ下候　八文字屋　八左衛門

（巻三）五十一ウ・奥附

三之巻終

▲扨皆様江お断申上まする

傾城禁短気先へ出し申筈ニ評判の本に

書のせ候へ共・少シいはく候ゆへ此内證鑑先へ出し申候

此跡へ追付来月中ニちがいなく出し候それゆへ書印候」

（五十一ウ）

并ニ男色破邪顕正記

傾城禁短気　色道大全

全部五巻

付リ女色法談之抜書

第一嶋原寺にて大尽はつめいの床談義

付リ西方女郎方便の涙一ッ滴七十六匁になる事

第二吉原大尽しばい大尽かなづち論

付リなり平流義の女道にては今の衆生晬にならざる事

第三難波の女郎同藝子互に立る小腹問答

付リ女道門あながちに勝て衆道門尻から閉口する事

第四茶屋ふろや手かけ者色の諸末寺友吟味

付リ巾着山白人寺ニしろとゝ云新宗を取リ立る事

第五女郎買五重相伝一重紙子

付リ分里一ッ遍上人六十万人色道往生の事

右の本近日ニ出来申候御買頼上候　八左衛門」

（奥附）

（巻四奥附）

▲何れ茂様へ申上まする

大和絵師京西川祐信ニ筆の命毛ヲ

尽させ肝門の秘書珎敷趣向ヲ作リ

戯画の板行追付出来それゆへ書印ッ候

并ニ上は色と情の染分裙は思ひの遠山染

風流色雛形　全部五巻

付リ睦語は尽ぬ百品染に心の移る色好み

御所風の浮世模様

付リ閨の結鹿子しめつけた寝巻小袖

町風の当世模様

付リ二人寝のぬれ衣透通る肌小袖

曲輪風の仕出シ模様

付リ口舌の抓染中直りは本の白小袖

ふ屋町通せいぐはんじ下ル町　八文字屋　八左衛門

（所在）東大霞亭（浅葱色無地原表紙三冊合綴本。五巻の内巻五のみ(A)を配補、他四巻は(B)）

(B)　同　　都立中央加賀文庫 8194

五巻　題同作〔同〕作　宝永七年序刊　後修　横二ツ切

五冊

浅葱色無地表紙原装。原題簽（褪紅色題簽）各外題両傍副題は備考項参照。寸法十二・六×十八・五糎。匡郭寸法十・九×十六・八糎。版式(A)に同然。但し一部板心等に異相あり。刊記な

し。巻㈢五十一ウ「傾城禁短気」延引の口上(A)のまま。板心(A)との相異点左の通り。

(イ)巻一　四十五丁「巻」字なし。

(ロ)巻二　三丁「三之巻」に作る。

(ハ)〃　十丁「一之巻」に作る。これは按ずるに板木欠損なるべし。

㈡巻三　七丁。柱刻なし。

㈣〃　卅四丁。「巻」「内」両字間の横線なし。

(印記)「栢」「本吉」等。

(備考)本書外題傍副題左の通り。

㈠「色道ひみつ／□の□ひ」

㈡「色道ひみつ／めどぎのうらかた」

㈢「色道ひみつ／一ふしの哥占」

㈣「色道ひみつ／四条辻うら」

㈤「色道ひみつ／あづさのうらなひ」

すると、国会蔵本(A)の巻二副題「色道ひみつ／あいきやうの占」と右のとでは、全く違っている。(B)題簽は別板新刻と推定される。又、本文も(A)(B)を比較すると(B)に於て覆せ刻(カブセ)による補刻丁が頗る多い。その様態は次表の通りである。

	(A) 国会蔵本	(B) 加賀文庫蔵本
巻一	序　初口一	カブセ
	〃　初口二	同板
	目録	カブセ
巻二	題簽	別刻
	目録	カブセ
	本文三—八	カブセ
	九—十四	同板
	十五・十六	カブセ
	十七・十八	同板
	十九	カブセ
	廿ノ卅・卅一	同板
	卅二—卅六	カブセ
	卅七—四十二	同板
	四十三—四十六	カブセ
	四十七・四十八	同板
	四十九	カブセ
巻三	目録	同板
	本文三—十	カブセ
	十一	同板
	十二・十三	カブセ
	十四—卅二	同板
	卅三・卅四	カブセ
	卅五・卅六	同板
	卅七・卅八	カブセ
	卅九・四十	同板
	四十一—四十九	カブセ
	五十・五十一	同板
本文一～終丁		全丁カブセ

巻四		
目録	同板	
本文三・四	同板	
五―十	カブセ	
十一	同板	
十二―十六	カブセ	
十七―十九	同板	
廿ノ卅	カブセ	
卅一―卅三	同板	
卅四	カブセ	
卅五	同板	
卅六	カブセ	
卅七―四十一	同板	
四十二―四十五	カブセ	
四十六―四十八	同板	
卅九―四十一	カブセ	
四十二	同板	
四十三・四十四	カブセ	
四十五―四十八	同板	
四十九	カブセ	

巻五	(A) 東大霞亭蔵本	(B) 加賀文庫蔵本
目録	同板	同板
本文三―八	同板	同板
九・十	カブセ	カブセ
十一―十三	同板	同板
十四	カブセ	カブセ
十五	同板	同板
十六―十八	カブセ	カブセ
十九―卅一	同板	同板
卅二―卅五	カブセ	カブセ
卅六―卅八	同板	同板

全般に亘って、かくも頻繁に原刻板木と覆せ刻補刻板木とが交替混在しているその理由は明らかでない。通常二丁乃至四丁を一枚の板木に彫るのが例であるから、こうした補刻の混在は、まことに理解に苦しむ。尚、(B)の方が覆せ刻であることは、挿画などを比較すれば、一見して瞭然たるものがあり、(B)の挿画は、着物の柄や紋など大幅に省略した所が目立ち、かつ顔立ちなど、(B)に於ては甚しく拙劣に崩れ祐信風の面影すらなくなりかけている。その外、漢字のルビや濁点など彫り落してしまった所も多く、(B)に於ける板心の不整も実は殆どがこの補刻の際の杜撰であったと看做すことが出来る。そしてこの補刻が、八文字屋に於て加えられたのであるか、又は八文字屋から他書肆へ流出して加えられたのであるか（但し、本書は明和度に升屋に売却された書目の中にも、又、明和九年刊『遣放三番続』安永五年刊『浮世壱分五厘』各巻末の八文字屋蔵板目録の中にも入っていない。が、後述の如く、赤松閣の蔵板目録中に見える。）、現在の所確定出来ない。

（所在）東大霞亭（浅葱色無地原表紙、巻三四原題簽。合綴三冊。印記「知多／米屋岡七／村木」「我妻蔵書」「三潴蔵書」等。

前述の通り(B)は巻一～巻四、巻五は(A)。又巻二も(B)の別行本の配補)。天理（浅葱色無地原表紙。巻五原題簽。合綴一冊。印記「兎角菴」外貸本屋印三顆等)。都立中央加賀文庫8195（存首三巻。浅葱色無地原表紙。巻一三原題簽。合綴一冊。印記「本藤」「澤」「雪」「本所三又」「米新」いずれも貸本屋ならん。(B)としては印面に磨損が少ない)。京大国文学研究室（存巻一三。改装。印記「(巳) 文庫」「永田文庫」等)。以上の外、国書総目録には果園、江戸川乱歩（巻四、一冊)、ケンブリッジ大、の三本が著録さる。この内、果園文庫旧蔵本は、右の天理蔵本がそれである。後二者は未見。レイン氏報告にもケンブリッジ大蔵本「宝永七年」とあるのみにて、原刊本か後修本か未詳。

尚、慶大蔵『教訓私儘育』（寛延三刊後印）巻末所附の「赤松閣蔵板目録」には、本書を掲載し「野白内證鑑八文字屋自笑作色道の諸わけを記五冊」とする。故に、江戸後期に赤松閣即ち千草屋新右衛門（大坂）に求板せられたことは確かであるが、現存の各本の内に千草屋の印本があるかどうか未だ詳かにしない。千草屋印本なる明証ある本は未だ見ない。

(6)(A) けいせい伝受紙子　　東洋文庫蔵甲本

五巻　題八文字自笑作〔江嶋其磧〕作　宝永七年閏八月刊（京　八文字屋八左衛門）横二ツ切合一冊（三Fa はイ12)

黒無地表紙改装。後補書題簽。寸法十二・七×十八・七糎。序一丁。序末左の通り。

宝永七ッのとし
閏名の月
作者
八文字
自笑㊞（鼎に亀字）

各巻頭目録一丁。目録題「けいせい伝受紙子（でんじゅがみこ）」（但巻二三ルビ「でんじゆがみこ」)。内題なし。四周単辺。匡郭寸法十一・一×十六・七糎。無界。十二行。挿画セリフ附刻。板心八文字屋様式、巻標黒格。柱刻「幾之巻　紙子　○（丁)」。尾題なし。各巻尾「一ノ巻終」「二ノ巻終」「三ノ巻終」「四之巻終」「五ノ巻終」

(丁付) (一)序「序」目録「初口」本文「一」―「廿ノ卅」―「四十」全32丁。(二)目録「初口二」本文「三」―「廿ノ卅」―「四十」全29丁。但、二丁欠現存27丁。(三)目録「初口二」本文「三」―「廿ノ卅」―「四十三」全32丁。(四)目録「初口二」本文「三」―「廿ノ卅」―「四十一」全30丁。(五)目録「初口二」本文「三」―「廿ノ卅」―「四十四」全33丁。

(挿画) (一)三ウ四オ、九ウ十オ、十四ウ十五オ、十八オ、卅三ウ卅四オ、卅八オ。(二)五ウ六オ、十オ、十五ウ十六オ、廿ノ卅ウ卅一オ、卅七ウ卅八オ、(三)五ウ六オ、十一ウ十二オ、十六オ、卅二ウ卅三オ、卅八ウ卅九オ。(四)五ウ六オ、十一ウ十二オ、十八ウ十九オ、卅四オ、卅九オ。(五)五ウ六オ、十二オ、十七オ、卅三オ、卅三ウ卅四オ、卅四ウ卅五オ、四十一ウ四十二オ。

(印記)「書林／菊源／中津」「斎藤文庫」「幸堂私印」。表紙見

返に幸堂得知の朱識語を存す。

（備考）改装本であるが、現在の所唯一の原刊完本。但し、改装時に奥附を除去したと覚しく、巻一の四十ウに刻された『傾城禁短気』の広告以外は一切奥附広告丁を欠いている。（国会蔵本の条参照）また巻二に二丁欠丁がある。即ち、「十七」「卅一」の二丁欠。原装の原刊本未見。

（所在）国会。（巻五のみは後修本(B)の配補。改装合綴本。各巻々末広告左の通り。）

（巻一）一ノ巻終

▲各々様江申上ます

傾城禁短気。説法者の散切。段々

のびたいひわけの髪。急ニとき申すニ付。

御しらせのためこゝにしるす」（四十ウ）

※この次に奥附広告あり。『野白内証鑑』国会蔵本巻三奥附の『傾城禁短気』広告と同板。

（巻二奥附）→国会蔵『野白内証鑑』巻二奥附『風流色雛形』広告と同板。

（巻四奥附）

▲お断申上ます

并ニ愛染明王色道秘密愛敬ノ占

諸色内證鑑　五巻

付リ野白見通し色の来る間算

右の本は一切色道の善悪・女の心にいかやうに思ひゐるなど・心の底迄を考しる事・ひとへに掌をさすがごとし・

占やうは右の本ニくわしく書印あり・

則先月々本出し置キ申ッ候間・

御もとめ御覧可ヒ下候

八文字屋

各々様

八左衛門」

尚巻五奥附には巻一奥附所附のと同じき、『傾城禁短気』の広告を附す。巻五のみ別行本の配補ゆえ、かかる重出が出来しなるべし。

又、京大国文研究室蔵本は、巻五のみの端本ながら、淡香色無地の原表紙、原題簽を存す。即ち、双辺隅入題簽にして、外題「けいせい伝受紙子　五ノ巻」右副題「大関の幡ぢなげ」左副題「四十八手の勝相撲」。本書奥附に、「当世御伽曾我付リ風流東鑑」の広告を附すが、これは『風流曲三味線』所附の其を修訂して流用したもの。(3)風流曲三味線の(B)項参照。印記「大沢氏蔵書記」等。

(B)　同　　天理図書館蔵

同　題同作〔同〕作　同刊〔後修〕（〔京　八文字屋八左衛門〕）横二ツ切五冊

黒無地表紙原装。原題簽。寸法十二・八×十八・三糎。外題傍副題各次の通り。㈠「すいの果は又もとの／水にかへるながれの身」㈡「おつとゝ違ふ妻子が心／瓜のつるになすび畠」㈢題簽欠㈣「やきはまぐり口のひらく新田／日比の悪をため池のかわづ」㈤(A)に既述。版式等(A)に同じ。（同板）。匡郭寸法十一・

○×十六・八糎。広告等一切無し。巻一巻尾の「一ノ巻終」及びその左『禁短気』広告删去。巻四の「四ノ巻終」も删去。

(備考) 現状、巻一の「四」の丁欠。巻二の首6丁及び尾2丁半欠丁。ツカレ本。

扨、本書は(A)と全丁同板ではあるが、一部板木に修訂を加う。即ち次の通り。

巻一(イ)八～廿九の各丁板心巻数字と柱題「紙子」を删除。

(ロ)第三・四・五章章題上の「第幾」の数字を入木修訂。

ただし数には変化なく字体のみ異る。

(ハ)巻末四十ウの「一ノ巻終」及びその左の『禁短気』予告文删去。

巻二　修訂なし。篠原進氏「『けいせい伝受紙子』臆断譜」(青山語文第六号)に本巻尾の「二ノ巻終」の「二」字東洋文庫(B)本のみなし、とされたのは誤認。東洋文庫(B)本にも「二ノ巻終」変化なし。(ただし刷りがカスレている。)

巻三　修訂なし。

巻四(イ)第一章章題一行入木修訂。

(ロ)第四章章題一行入木修訂。

(ハ)「十」ウ十二行目下半入木修訂。即ち、「慈非心ある者共哉」→「しひ心有もの共かな」と訂す。

(ニ)「四」丁～終丁、板心の巻数字と柱題「紙子」を删去。(除「十一～十三」)。

(ホ)巻尾「四ノ巻終」删去。

(イ)(ロ)は入木修訂してあるといっても、文言には殆ど変化はない。字体やルビ程度の違いである。)

巻五(イ)「十二」～「四十一」板心の巻数字と柱題「紙子」を删去。

(ロ)「四十一」終行下半入木修訂。即ち、「されば高貞師直両家」→「誠に一国の主あへなく」と訂す。

(ハ)第四・五章の章題上の「第四」「第五」の数字のみ入木修訂。但し数に変化なく行体を楷書に訂したにすぎない。

以上十一種の修訂が加わっている外は、総て同板で、覆セ刻等別板を起した丁はない。印面の状態よりすれば、(B)が後修本であることは明らかで、この不可思議な修訂が何を意味するかは分明でない。或いはこの板木を一部改竄して他書に流用せんとした痕跡などでもあろうか。尚、本書は、明和の升屋求板書目の中に入っていないが、明和九年刊『遣放三番続』安永五年刊『浮世壱分五厘』等所附の八文字屋蔵板目録の内にも見えない。従って、板木の帰趨については未詳。

(所在) 東洋文庫岩崎乙本(三Faはイ11)(改装合綴本。印記「謹節堂平氏書画記」「梅園所庫」。巻四後表紙見返に『忠信金短冊』なる浄瑠璃本の広告を墨書してあるが、そのいわれははっきりしない)。この外、国会蔵本の巻五のみはこの(B)の配補。国書総目録には、林美一氏蔵(巻一二・二冊)も著録されるが未見。又、レイン氏報告に「傾城伝受紙子　宝永七年」と記載されたケンブリッジ大蔵本があるが、その(A)(B)何れなるか等、未見につき不明。

(7) 色ひいな形　　某氏蔵

五巻　題八文字自笑作〔江嶋其磧〕作　西川祐信画　宝永八年二月刊（京　八文字屋八左衛門）横二ツ切五冊

白地雲母引地に萌葱色にて七宝繋花菱紋刷出行成表紙（巻一・五のみ）原表紙。寸法十三・三×十八・七糎。表紙中央題簽貼付痕あり（題簽欠）、但、巻五に原題簽の残片を存す（右半下部「あつい」の三字を読み得る。）、巻二三四は白地麻葉松菊丸紋藍刷行成表紙改装。各中央に後補書題簽「色雛形」。序一丁。序末左の通り。

大和絵師
西川祐信筆
宝永八ッの春
作者八文字
自笑㊞（鼎形に亀字）

各巻頭目録一丁。（巻四目録丁欠）各巻目録題次の通り。㈠御所風㈡侍風㈢百性風㈣欠㈤商職風。内題なし。隅入匡郭三方双辺。匡郭寸法十・六×十六・六糎。無界。十四行。板心八文字屋様式、巻標黒格。（但、挿画丁は巻標なし）。板心に柱題等なく、各丁裏ノドに長方形の枠を設け、そこに各略題と丁付を刻入。但、現在はいずれも綴糸中にかくれている。各略題㈠公家㈡侍㈢百性㈣町㈤商。尾題㈠御所風終㈡武家風終㈢百性終㈣町風終㈤商職風終。巻末広告及び刊記左の通り。（巻五終丁）

▲扨皆様江お断申上まする
此色ひいな形十巻の箱入にて出し申ス
筈ニ候へ共板行延引ゆへ先五巻にて
出し申候残リ五巻は追付出し申候
則げだいは
傾野染分　情ひいな形　五巻
一ノ巻傾城は偽りとなる起請のほうご染
二巻遊女は心にへだてのある二重染
三巻出女は門立に顔のあつい千牧形
四巻地若衆は腕をひいて血をしぼり染
五巻藝子は八方へ情をかける蜘の巣小紋
右之本当月中ニちがいなく出し申候」（丁表）
并ニ男色破邪顕正記
傾城禁短気　色道大全
全部六巻
付リ女色法談之抜書
辛ころは金銀の涌泉の壺入
三ヶ津
大評判　役者大福帳　三巻
夘さぎの耳聞事な藝子の噂
右二色共に四五日中ニ本出し申候
宝永八年夘二月吉日
ふ屋町通せいぐはんじ下ル町　八文字屋八左衛門板」（丁裏）

（丁付）㈠序「序」目録「初口」本文「初一」―「初六」「一」―「十九」全27丁。（内「一」―「十三」挿画）㈡目録「初口」本文「初一」―「初七」「一」―「廿」全28丁。（内「一」―「十

三」挿画）㈢目録「初口」本文「初一」―「初六」「一」―「十九」全26丁。（内「一」―「十三」挿画）㈣目録欠。本文「初一」―「初六」「一」―「十八」現存25丁。（内「一」―「十三」挿画）㈤目録「初口」本文「初一」―「初五」「一」―「十九」。及び終丁「終」（広告刊記）。（内「一」―「十三」挿画）全26丁

（印記）某氏蔵印のみ。

（備考）挿画は殆ど春画。各挿画第一丁表は扉絵で、筆彩を施す。これ刊行時の彩色ならん。尚、本書は取合本にて、もと巻一・五の端本であった所に、後に巻二三四の三巻を獲て配補されたる由。いづれも、斐紙に刷られた極早印の善美本で磨損虫損汚損等殆どない。

（所在）京大国文学研究室（存巻五、一冊。巻首及び春画丁欠。挿画の内、さしさわりなき者のみを存す。料紙楮紙。同板。ツカレ本。）尚、林美一氏が「古画秘伝」（季刊「浮世絵」別冊・昭和五十二年三月刊。画文堂刊）に於て、別の一本を紹介しておられるが、その所在は不明につき未見。

(8)(A) 傾城禁短気　　東京大学図書館蔵

六巻　題八文字自笑作〔江嶋其磧〕作　宝永八年（正徳元年）四月刊　（京　八文字屋八左衛門）　横綴半紙本六冊

淡縹色雷紋繋唐草紋空押行成表紙原装。寸法十四・八×二十二・三糎。原題簽。角書「色道／大全」外題「傾城禁短気　幾之巻」副題（外題左傍）→備考参照。序一丁。序末左の如し。

宝永八年卯月中旬

作者八文字　自笑㊞（鼎に亀字）

各巻頭目録一丁。目録題「傾城禁短気」。三方双辺隅入匡郭。無界。十四行。板心（書根）八文字屋様式、巻標黒格、（巻一巻標なし、巻二以下巻次の下るに従って右方に移行）。各丁ノドに耳格を設けて略題巻付丁付を刻す。巻一「たんき一ノ巻（丁）」巻二「きんたん二巻（丁）」巻三「三巻きんたん（丁）」巻四「きんたん四巻（丁）」巻五「五巻きんたん（丁）」巻六「六巻きんたん（丁）」。尾題無く、各巻尾に「一（～六）之巻終」（巻三のみは「三ノ巻終」）と刻す。各挿画にセリフ等附刻。奥附左の如し。（巻六後表紙見返）

▲扨お断申上まする

傾野染分　情ひな形　西川祐信筆　五巻

付リ恋と色との二重染　并ニ好色一代詭牢人

当世御伽曾我　全部八巻

付リ風流東鑑　并ニ母はお針ニ子は色里に

傾野　咲分色孖　全部五巻

付リ父は他国ニ子は野郎屋に

右三色共ニ　本出し申候

宝永八年卯月吉日

ふ屋町通せいぐはんじ下ル町　八文字屋八左衛門板

(丁付)㈠序「初口一」目録「二」本文「三」―「卅三」全33丁。㈡目録「二」本文「三」―「廿ノ卅」―「四十二」全31丁。㈢目録「二」本文「三」―「廿ノ卅」―「四十四」(終丁半丁)全33丁。㈣目録「二」本文「三」―「卅四」全33丁。㈤目録「二」本文「三」―「廿ノ卅」―「四十二」全31丁。㈥目録「二」本文「三」―「卅九」及び奥附半丁。全28丁半。

(挿画)㈠五ウ六オ、十三ウ十四オ、廿一ウ廿二オ、廿九ウ卅オ、㈡五ウ六オ、十三ウ十四オ、卅一ウ卅二オ、卅九ウ四十オ、㈢五ウ六オ、十三ウ十四オ、卅一ウ卅二オ、卅九ウ四十オ、㈣五ウ六オ、十三ウ十四オ、廿一ウ廿二オ、廿九ウ卅オ、㈤五ウ六オ、十三ウ十四オ、卅一ウ卅二オ、卅九ウ四十オ、㈥五ウ六オ、十二ウ十三オ、十九ウ廿ノ卅オ、卅六ウ卅七オ。

(印記)「菊之屋」「待賈堂」「江戸四日市古今珍書僧達摩屋五一」「かながきぶんこ」「かながきろぶん」「珍々堂」「青洲文庫」等。

(備考・所在)外題左傍副題左の通り。

㈠太夫方便の涙一滴七十六匁なる事

㈡女道門穴かちに勝て衆道門尻から閉口する事

㈢茶屋ふろや妾者色の諸末寺友吟味

㈣なり平流義の女道ニ而今の衆生すいニならざる事

㈤まぶの恋だねおなかニやどる大腹問答

㈥分里一遍上人六十万人色道往生の事

現在迄の所、初印の完本未見。全巻揃本としては右の東大蔵本が最も善本。但、奥附刊記丁の近刊予告文「三色共ニ」の下に二格を空しくしているのは後印たる事を証するもので、初印時は左の如くであった。

「右三色共ニ来月本出し申候」

この「来月」二字を有する奥附を附した本は慶大斯道文庫蔵本(存巻六一冊・改装本)及び、東北大狩野文庫蔵本(巻六のみ初印本の配補、一～五はずっと後印本)の二本がある。又、都立中央図書館加賀文庫蔵本(8178)(存巻二・五、二冊、縹色布目表紙、原装原題簽)は二冊共初印と認むべき印面の美しい善本。又、広島大学国文学研究室蔵本(取合本、改装本)のうち巻四のみは初印と認むべき善本、他巻はずっと下る後印本の配補。以上の結果、初印本と見るべき者、巻二、四、五、六、の四巻のみ残存。尚、赤木文庫蔵本にも、東大蔵本と同じ空格ある奥附が有るが、横山氏御示教では、もと奥附なき本であったのを、後に奥附つきの巻六の端本が出た時之を求めて、奥附のみを取り、これに配補した由、そしてその巻六のみの端本は、奥附を取去った後、リチャード・レイン氏に売却したとの事である。更に、吉田幸一氏蔵本(取合改装本、六冊)の内、巻四五の二巻のみは東大蔵本と同程度の早印本、余は後印本の配補。関西大学蔵本のうち、巻二、四のみ、東大蔵本と同じ頃の早印本。京大国文学研究室蔵本は、奥附は無くなっているが、

印面より見るに、東大蔵本と同じ早印本であろう。現状は、原表紙であるが、奥附の所は新紙を後補。香川大学神原文庫蔵本（存巻一・三、端本、早印本なれど保存悪し。）

さて、東大蔵本等、第二次の印本に於て、奥附の「来月」二字を削去したのは、広告の諸書が既刊になった為かと思われ、『情ひいな形』は未見であるが長谷川氏によれば正徳二年刊、『当世御伽曾我』は正徳三年刊、『野傾咲分色孖』は下って享保三年の序刊であるから、遅くみれば享保三年以後の印本と考えることも出来る。ただ、正徳三年から享保三年までは大分開きがある事からすると、或いは、『御伽曾我』が刊行になった時点で、『色孖』の方はまだ当分刊行のメドがつかないからというような理由で「来月」を削り去ったものとも考え得る。いづれにせよ、正徳三年以後の印本である事は認めてよいであろう。

(B) 同　　早大国文学研究室蔵本

同　題同作〔同〕作〔宝水八年〕刊〔後印〕無刊記

横半六冊

淡縹色布目表紙原装、原題簽。版式等(A)に同じ。寸法十五・七×二十二・三糎。匡郭寸法十三・〇×十九・四糎。

(印記)「癸岡」「巣居」「仲七」「只誠蔵」等。

(備考)原装ながら奥附のない一群の本は、印面いずれも損耗が甚しく、相当に後の印本と見られる。その印年や印行者を確定することは出来ぬ。但し、慶應義塾図書館蔵『江戸時代書林蔵板目録類聚』所収「八木氏蔵板書略目録」（京寺町通松原上ル町北ヨリ、書林菱屋治兵衛）の内に「傾城禁談(ママ)気　六冊」と見えている。この目録は凡そ天明頃のものと考えられるので、或いは、明和九年以後、安永天明頃に八文字屋から流出して、菱屋で刷られたものかもしれぬ。（補説参照）

(所在)京大教養部林文庫（鼠色無地原装、原題簽。貸本屋上りのツカレ本六冊）。赤木文庫（奥附は配補、元は無刊記。砥粉色無地原表紙、原題簽。印記「中川氏蔵」等。六冊）。東洋文庫岩崎甲本（三Faはイ10）（砥粉色無地原表紙、原題簽。巻二は大久保葩雪旧蔵別印本の配補、但、いずれも(B)。六冊）。同文庫岩崎乙本（三Faはイ9）（改装。巻二四六は別印本配補、いずれも(B)。印記「紫水」等。六冊）。広島大国文学研究室（改装。原題簽保存。巻四のみ(A)の早印本、他は(B)。六冊）。吉田幸一氏（改装。六冊。但巻四を除き原題簽保存。巻四五は(A)、他は(B)。印記「靄々」「停雲」）。天理（巻一二五六縹色無地原装。三四は改装。巻二五六原題簽、各冊寸法印記不同にして、バラバラの端本の寄せ本と見ゆ。印記「水谷文庫」〈巻一〉「葩雪」〈巻三〉「臨風文庫」〈各冊〉等。いずれも(B)。六冊）。都立中央特別買上文庫（砥粉色無地原表紙巻一～四原題簽保存。印記「蜂屋文庫」「芝」等。合一冊）。同加賀文庫（8177）（改装。巻一は配補。印記「南畝文庫」「大田氏蔵書」「蜀山人印」「好文堂」等。南畝の「耕書堂所贈、鶯谷／第六巻闕」なる手識あり。又天保元年柴廼舎主人の手識あり。これ「好文堂」に同人か。巻一は相当に損耗のある後印本で、巻二～五はそれよりは早印であるが、いずれも(B)としてよかるべし。六冊）。東北大狩野文庫（縹色無地表紙原装。原題簽。巻一～五は(B)、巻六のみ(A)。印記

「森本文庫」「中井文庫」等。六冊)。名古屋大岡谷(存巻一二三五。四冊。縹色無地原装。原題簽。但巻五のみ改装。印記「真照文庫」)

(C) 同　　関西大図書館蔵

同　題同作〔同〕作〔宝永八年〕刊　文政十二年四月印

(大坂河内屋吉兵衛　今津屋辰三郎)　横半合一冊

淡縹色無地表紙。寸法冊により不同(巻六の原表紙を用いて合綴)原題簽。(題簽別板新刻。)「〔色〕道/〔大〕全/傾城禁短気」外題左傍副題「一遍上人六十万人色道往生の事」。版式(A)に同じ。奥附刊記左の通り。

煎茶仕用集　全二冊

此書は煎茶一式之事を論し貝之類は図に著し喫茶好君子清話之備覧とす

三才因縁辨疑　前扁三冊　後扁三冊

此書は天地人三才之事天は日月星雨地は気形人之身上之事迄児女の諭安く教ゆ

長崎夜話草　長崎西川先生著　同五冊

此書は長崎にて事実の珍説をあまた集め次に忠孝貞婦烈女清直儀夫之類おもしろき噺を集む

教訓鄙言草　法橋玉山画　前扁二冊　後扁二冊

此書はいにしへの諸名賢諸君子之名言の教となるべきをあまた集め絵をまじへて面白きはなしを児童に諭安きやうおしゆ

文政十二己丑年四月

大坂心斎橋南本町　河内屋吉兵衛

同江戸堀壱丁目　今津屋辰三郎

(印記)「鯉屋蔵書」「春翠文庫」「成井蔵書」等。

(備考)本書は次の通り四群の取合本。

(イ)巻一、(ロ)巻二・巻四、(ハ)巻三、(ニ)巻五・巻六。

印面磨損の様態より見るに、(ロ)は(A)、(イ)(ハ)は(B)、(ニ)のみが文政の印本か。印記から推定するに、右の四種の別印本を春翠文庫に於て取合せて一冊に合綴せるものの如し。

本書に就て、野間光辰氏が、古典大系浮世草子集の解題に「特に巻六題簽の小外題の文句『分里一遍上人六十万人色道往生の事』の『分里』の二字、あるものとなきものと二種あり。」と述べられた、その二字なきもの、というのが本書である。この二字を省いた理由は分明でない。いづれにせよ、この題簽だけが印面極めて鮮明であるところから見れば、文政度の印行時に新刻せられたものかもしれぬ。(但し、これに就ては多少の疑義がある。→所在の項参照)

(所在)東大国文学研究室蔵本は淡縹色無地表紙原装。原題簽〈新刻〉。奥附なし。但し印行時より無刊記なるものか、又は後に後印奥附だけを除去したものか不明。新刻題簽の外題左傍副題左の通り。

㈠題簽欠
㈡女道門穴から(ママ)に勝て衆道門尻から閉口(へいかう)する事
㈢茶屋ふろや妾者色(てかけもの)の諸末寺友吟味
㈣なり平流義の女道ニ而今の衆生すいにならさる事
㈤まぶの恋だねおなかにやどる大腹問答
㈥一遍上人六十万人色道往生の事

この新刻題簽を附せるものは総じて板面の傷みが著しく、また副題に誤刻などあるところよりしても、八文字屋から別の書肆に求板されて後の印本なるかと思われる。ただし、京大教養部蔵の一本など、印面は本書と全く同程度で、要するに、特に改装本の場合など、(B)(C)は之を厳格に区別することは殆ど不可能である。従って或いは、この新刻題簽板木は、第一次求板者菱屋の手によって新刻せられたとも考え得、或いは、文政度の新刻とも考え得る。それ故、現在の所は、便宜的に、新刻題簽を有する者は(C)項にまとめて、仮に文政十二年印本と考えておくこととする。

その外、筑波大図書館蔵本は、巻一二三は(B)後印本、巻四五六は(C)後印本の二種の本の取合。巻四五六には、新刻題簽を附すが、六所附の其は、実は巻一の題簽を副題を截取り、巻付を墨訂して六に見せかけたもの。巻一二三には、原刊旧題簽を付す。

尚、国書総目録によれば、国会にも文政十二年印本がある筈であるが、現在紛失の由で未見。国会本奥附は「浮世草子名作集」(評釈江戸文学叢書)解題中に写真掲出。その外、江戸川乱歩、尾崎久弥氏旧蔵本については未見。(尾崎氏旧蔵本、或いは天理蔵本と同一か、未詳)。果園文庫旧蔵本、栗田文庫旧蔵本、何れも所在不明につき未見。又、レイン氏報告には、ケンブリッジ大蔵本として「傾城禁短気　正徳元年」とあるが未見につき詳細未詳。

(補説)本書は、明和四年升屋求板の旧八文字屋本目録(岩瀬文庫蔵『那智御山手管滝』等所附)には見えず、却って、明和六年八文字屋刊『略縁記出家形気』(大阪府立図書館蔵本)所附「読本自笑其礦著述目録」や、明和九年八文字屋刊『遣放三番続』(東大霞亭文庫蔵本)所附「ひらかな絵入読本目録作者自笑其礦」又、長谷川氏年表によれば安永二年刊『役者一陽来』巻末蔵板目録にも本書名が掲げられてあるから、この頃までは、他の幾らかの書と共に八文字屋の手許に残ったのである。従って、若し菱屋に求板せられたとすれば、それ以後の事で、すると、凡そ安永天明の交に八文字屋を出たものかと思う。それで天明八年の大火にもかからず、更に文政に至るまで命脈を保ったものであろう。

(9)　情ひいな形

〔五巻〕(〔京　八文字屋八左衛門〕)

未見。評釈江戸文学叢書『浮世草子名作集』に於て〔正徳二年〕刊と推定され(藤井乙男博士)、長谷川強氏も之に従われた。故に今仮に、この所に配す。本書は未だその完本の存在は確認されたことがなく、林美一氏も「古画秘伝」(前掲)の中

に、其の巻一のしかも残巻本を入手されたのが唯一の所見の如く報告しておられ、その外に所伝を聞かない。

(10)(A) 頼朝三代鎌倉記　　都立中央加賀文庫蔵

五巻　正徳二年正月序刊　無刊記　（〔京　八文字屋八左衛門〕）　大五冊

香色無地原表紙。原題簽（隅入双辺「新板絵入頼朝三代鎌倉記」）。上に茶色布目紙覆表紙。寸法二十三・八×十七・四糎。巻頭序一丁。序末に「正徳弐年／辰之初春」とのみ刻して作者名を署さない。各巻々頭目録一丁。目録題「頼朝三代鎌倉記」。内題なし。四周単辺。無界。匡郭寸法二十・八×十六・〇糎。十二行。挿画セリフ附刻。但巻一のはじめの画と巻五巻末の画にはセリフなし。板心八文字屋様式。巻標黒格。柱刻「幾之巻一（丁）」。尾題なし。各巻末「幾ノ巻終」。刊記なし。跋・蔵板広告等なし。

（丁付）(一)序「序」目録「目録」本文「三」―「十五ノ廿」―「廿五」全20丁。(二)目録「目録」本文「三」―「十ノ廿」―「卅一」全20丁。(三)目録「目録」本文「三」―「十二ノ廿」―「廿九」全20丁。(四)目録「目録」本文「三」―「八ノ十五」―「廿四」全16丁。(五)目録「目録」本文「三」―「七ノ十七」―「廿七」全16丁。

（挿画）(一)四ウ五オ、十一オ、廿二ウ廿三オ。(二)四ウ五オ、廿一オ、廿七ウ廿八オ。(三)四ウ五オ、十一オ、廿五ウ廿六オ。(四)四ウ五オ、十六オ、廿一ウ廿二オ。(五)四ウ五オ、廿オ、廿四ウ廿五オ、廿七オ。

（印記）「加賀文庫」等。

（備考）印面・保存ともに善良な美本。全丁に襯紙を挿し、天地断截あるかと見える。

扨、本書の版式を検討すると、下条の如き特異点が指摘できる。

(1)柱題が巻付のみであること。

(2)序、各巻目録、巻一ノ一、巻五の終丁ウ（或いは巻五の廿六ウ十二行目一行）等の板下書は外の丁とは別筆かと見える。

(3)巻四ノ十六オの挿画は画師を異にするかと見える。

(4)巻標はあとから入木したように見える。

(5)巻一の第一画と巻五の巻末の画との二面にはセリフを附刻しない。

これらの点を勘案すると、或いは、この板木は八文字屋で作られたのでないかもしれないことが疑われる。例えば、いずれか他の書肆で作った板木を買収して、版心の略題を削り、之に加うるに巻標を以てし、序・目録を新刻し、巻首尾に手を入れて、自家新刻書として摺印発売するというようなことがあったのではないかという可能性も一概に否定出来ない。時恰かも八文字屋と其磧の確執が生じた頃である。八文字屋にも苦肉の策を講ずる理由は充分にあったのである。

（所在）東洋文庫岩崎（改装。題簽欠。巻四の「廿三」丁欠。虫損が多い。印記「銚子／飯沼村／田中玄蕃」。五冊）。国会（改装。後補書題簽。挿画に後人の筆彩を加う。五冊）東大国文学

研究室（改装。題簽なし。ツカレ本五冊）以上三本は早印本。香川大神原（香色無地表紙、原装。原題簽。巻一の第一挿画をはじめ板面の傷みや疲れが目立つ。後印本と見える。印記「岩崎文庫」「神原家図書記」等。五冊）。蓬左文庫（存巻五、一冊。改装。題簽欠。甚しい汚レ本。尾崎久弥コレクションの内）後二者は後印本。（或いは升屋印本か、未詳）

(B) 桜御殿邯鄲の枕　　国会図書館蔵

五巻　題増舎大梁・半井金陵作　〔正徳二年序〕刊　明和九年（安永元年）三月修（改題改竄）（大坂　升屋彦太郎）　大五冊

利久鼠色無地表紙原装。巻一・五のみ原題簽残存。（隅入双辺「新板絵入桜御殿邯鄲の枕　幾之巻」）。上に渋引覆表紙をかく。寸法二十四・六×十七・六糎。序なし。巻頭に「桜御殿邯鄲之枕発端」三丁。発端末に左の如く署名。

壬辰　　増舎大梁
桃月　　作者　半井金陵

各巻巻頭目録一丁（『鎌倉記』のとは別板新刻）目録題「桜御殿邯鄲の枕」。版式等(A)に大体同じ。（(A)との異同は備考項参照）。刊記並に近刊広告下の通り。（巻五ノ廿七ウ）

ちりばめ侍りぬと筆おさめぬ　　五之巻終

明和壬辰年　　大坂心斎橋南二丁目角
三月廿日　　升屋彦太郎板

此所ニ書記し御披露仕候

高雄の紅葉　契情の手管を染上し伊達小袖海尊仙人が長咄
しは／いつまでも安藝のこぬ伽羅木下駄の
└因縁

新板よみ本　大系図後日噺　全五冊

宮城野の萩　蝦夷の内裏の饗応に甲斐〳〵しき角力の出入
は加茂の／社参の帰りがけ身請の釣がへは
└浮絵覗の懇丹

右来巳正月二日ゟ本出シ申候御求め　　作者　増舎大梁
御覧可被下候奉頼上候巳上　　半井金陵

巻尾に升屋彦太郎の蔵板目録一丁及び「八文字屋物と申馴売弘候読本類目録」二丁。奥附に横本を主とする旧八文字屋刊本等蔵板目録半丁。計三丁半を附す。（図版I参照）

（丁付）(一)発端「壱」「弐」「三」本文「四ノ六」―「十」「又十」―「十五ノ廿」―「廿五」。(二)(三)(四)(五)(A)に同。

（挿画）巻一に「又十」の丁オ・ウの挿画一丁二面を増加。他は(A)と同。

（備考）『頼朝三代鎌倉記』との異同下の通り。

頼朝三代鎌倉記	桜御殿邯鄲枕
巻(一)　序	除去
目録	「桜御殿邯鄲之枕発端」新刻 別板新刻

第一章	除去
第二章	章題上の［第二］を削除して第一章の如く見せかく。他は同じ。
第三章	同じく［第三］削去。「十」ノ次に「又十」（オウ共挿画）を新刻増加。他は同じ。
第四章	［第四］を削る。他は同じ。
巻二～巻四	各巻目録を新刻し、各章共章題上の［第幾］を削去。
巻五　目録～廿六	右に同じ。
廿七	別板新刻。（異文に作る。）廿七オは原刻本さし絵なりしを省略。故に(B)は巻五のさし絵が一面少ない。

（所在）天理（利久鼠色原表紙原題簽。印記「大坂長堀／白髪町／書林泉屋佐七」「永田文庫」等。五冊）。京大文学部頒原（改装。巻一「又十」「十一」の二丁欠。合一冊）。外に東京国立博物館蔵本あるも未見。

(11)(A)　今川一睡記　　天理図書館蔵

五巻　正徳三年正月刊（京　中嶋又兵衛）大五冊

縹色青海波紋空押行成表紙改装。後補書題簽。寸法二十四・七×十七・六糎。序なし。各巻頭目録一丁。目録題「今川一睡記」。内題なし。四周単辺。無界。匡郭寸法二十・八×十六・二糎。十一行。挿画セリフなし。画風非祐信風。板心八文字屋様式。巻標黒格。柱刻「前幾之巻　一（丁）」。尾題なし。各巻尾「一（～四）之巻終」「五ノ巻終」。刊記次の如し。

正徳三年己ノ正月吉日　中嶋又兵衛新板

（丁付）目録「二」本文「三」―「八ノ十七」―「廿六」全16丁。㈡以下同様に「二」―「九ノ十八」―「廿八」全18丁。㈢「二」―「十ノ廿」―「廿六」全15丁。㈣「二」―「十一ノ廿二」―「廿六」全14丁。㈤「二」―「十ノ廿三」―「廿八」全15丁。

（挿画）㈠四ウ五オ、十九オ。㈡四ウ五オ、廿六オ。㈢五ウ六オ、廿二ウ廿三オ。㈣四ウ五オ、廿三オ。㈤四ウ五オ、廿五ウ廿六オ。

（印記）「岡埜図書」等。

（備考）早印本で保存も良いが、全丁裏打を施す。或いは天地断截あるか。

（所在）京大国文学研究室（改装。印記「江州日野岡本町沢田金左衛門」「山邨氏蔵」「江戸四日市古今珍書僧達磨屋五一」「待賈堂」「梅園所庫」等。印面磨損せる後印本。特に巻二四の目録など板木傷み甚し。巻二の廿四の丁欠。大合一冊）。某女子高校（首巻欠。存巻二―四。改装。大四冊。印面は京大本よりはずっと早い印本）。

(B)　同

〔同　同刊　後印（京　八文字屋八左衛門）〕

未見。八文字屋の刊記ある者を見ないが、或いは、京大蔵本はこれか。早大蔵『逆沢渦鑑』（寛保元年刊）等所附の八文

字屋蔵板目録に出る。故に早く八文字屋に求板せられたことを知る。

(C) 同

〔同　同刊　明和四印　(大坂　升屋)〕

未見。明和四年の升屋求板目録に掲載。ただし、升屋印本と目すべき明微ある本を未だ見ない。国書総目録に「明和四版―江戸川乱歩」とあるがこれであろう。

(D) 同　　国会図書館蔵

同　同刊〔後印〕(大坂　和泉屋卯兵衛)　大合一冊

縹色無地表紙原装。原題簽(隅入双辺「新板絵入今川一睡記　幾之巻」(但、巻二、四、川字を河に作る)。上に茶色覆表紙をかく。寸法二十五・五×十八・五糎。版式等(A)に同じ。同板後印。匡郭寸法二十・六×十五糎。刊記書肆名刪去。巻末に「よみ本目録　書林大坂しんさいばし北詰いつみ屋卯兵衛板」とせる蔵板目録附綴(図版Ⅱ)

(印記)「東石園木村蔵」「苔春山房」「道明寺屋」「道卯」等。

(備考)中嶋板と同板の後印本にして刊記の書肆名のみを刪れるもの。

(所在)国書総目録には、外に、東博蔵本、早大蔵本、竜門文庫蔵本を著録するが、いずれも未見。但し、早大蔵本は、柴田光彦氏御示教では、書肆名を刪去せる改装本にして、蔵板目録等は一切無い由であるから、多分いづみ屋の後印本であろう。

(補説)本書は、書誌上、八文字屋刊本と異相が少なくない。

(イ)挿画にセリフのない事

(ロ)画師が祐信風でない事

(ハ)毎半葉十一行という版式

(ニ)巻標の入れ方が、巻五は丁付の下に来るなどやや特殊であること。

こうしたところからみると、八文字屋の刊刻書とは認めがたいが、一方丁付が「二」から始まって飛丁を入れる事や、板心に巻標を附す形式など、八文字屋のスタイルに従っている所も少なくない。八文字屋の指導下に中嶋が刊行し、まもなく八文字屋が板木を買収して蔵板印行していたものであろう。

(12) 当世御伽曾我

(13) (A) 同後編風流東鑑　　天理図書館蔵

十巻(各五巻)〔江嶋其磧〕作　前編正徳三年正月刊後編同年二月刊　(京　八文字屋八左衛門)　大十冊

茶色無地表紙原装。題簽欠。寸法二十四・九×十七・九糎。封面『萬色正徳雛形』五巻の既刊広告(備考参照)。首巻巻頭総目録一丁。(備考参照)。各巻目録一丁。目録題「当世御伽曾我」「当世御伽曾我後風流東鑑」。各巻付けは「一之巻」～「十之巻」の通し巻付。四周単辺。無界。匡郭寸法前編二十・九×十六・三糎、後編二十・一×十五・九糎。十二行。板心八文字屋様式。巻標『御伽曾我』単黒格『風流東鑑』双黒格。柱刻「一(～十)之巻御伽曾我一(丁)」。(但、巻十の四・五の両丁は巻標単黒格)。挿画セリフ付刻。尾題なし。各巻尾に「一(～四)之巻終」「六(～十)ノ巻終」と刻す。(巻五にはなし。)巻六封面に

『風流東鑑』既刊『役者座振舞』近刊の広告（備考参照）。巻十巻末に『野傾咲分色抒』『義経風流鑑』『好色名取川』三点近刊予告（備考参照）。その奥に刊記左の通り。

正徳三年癸巳二月吉日

ふ屋町通せいぐはんじ下ル町八文字屋八左衛門新板

又、巻五の末にも「八文字屋八左衛門板」と刻す。

（丁付）㈠総目録丁付なし。目録「二」本文「三」―「十ノ十五」―「廿八」全23丁。㈡目録「二」本文「三」―「十一ノ十六」―「廿六」全20丁。㈢以下同様に「二」―「十二ノ十七」―「廿五」全19丁。㈣「二」―「十三ノ十八」―「廿八」全22丁。㈤「二」―「十四ノ十九」―「卅」全24丁。㈥「二」―「十五ノ廿」―「卅」全24丁。㈦「二」―「十六ノ廿一」―「廿八」全22丁。㈧「二」―「十七ノ廿二」―「廿七」全21丁。㈨「二」―「十八ノ廿三」―「廿七」全21丁。㈩「二」―「十四ノ廿」―「廿四」全17丁。及び奥附広告半丁。

（挿画）㈠四ウ五オ、九オ、廿オ、廿六ウ廿七オ、㈡四ウ五オ、十一ノ十六ウ十七オ、廿四オ、㈢四ウ五オ、十二ノ十七オ、廿三ウ廿四オ、㈣四ウ五オ、十オ、廿オ、廿六オ、㈤四ウ五オ、十オ、廿一オ、廿八オ、㈥四ウ五オ、十二ウ十三オ、廿六ウ廿七オ、㈦四ウ五オ、十一オ、十六ノ廿一オ、廿六オ、㈧四ウ五オ、十二オ、廿四ウ廿五オ、㈨四ウ五オ、十一オ、十六オ、廿六オ、㈩四ウ五オ、十一オ、廿二ウ廿三オ。

（印記）「わたやのほん」等。

（備考）各広告等左の通り。

（巻一封面）

萬色正徳雛形　全部五巻

大和絵師　西川祐信図

并ニ男女当流新規の替り紋

第一　御所染と屋敷模様は桜と梅色香ある御物好

第二　町方の模様は色品替る染分接木の花のいきかた

第三　一切遊女の模様は流に青杜若の色ぶかいこのみ

第四　風流の浴衣模様は心の涼しき夏草の花に寄工夫

第五　地若衆と野良の模様は柳の腰付すそ染の思入

右の本巳ノ正月二日ゟ出し置申候　八文字屋八左衛門

（各章「第幾」の枠は角を取ってある。）

（巻一巻頭総目録）

当世御伽曾我　十巻惣目録

付リ好色一代詫牢人誓紙の接紙子

一之巻　曾我の先祖遺恨の根元。伊東祐親工藤祐経六原にて所領双論之事

十郎五郎が母出所。京ノ小次郎が実父。鬼王団三郎が／来由。河津俣野相撲并ニ祐泰近江八幡ニ討

「るゝ事

三之巻

河津が後家曾我へ改嫁の因縁并ニ大磯の
虎が父母系図。同虎と祐成縁を結ぶ始りの事

四之巻

仮粧坂の少将出所。箱王丸還俗の旨趣
同少将と恋暮并ニ母の勘気を蒙る事

五之巻

和田ノ義盛方便の大酒盛并ニ祐経が娘白菊
男躰ニ而廓通ひ。虎と十郎と心中の真を尽す事

右是迄五巻巳ノ正月二日ゟ本出し置申候」

（総目録オ）

御伽曾我
後の五巻

風流東鑑

付リ忠孝侫奸二筋の縄心のいましめ

三浦ノ与市犬房丸大磯にて傍若無人の行跡
仁田ノ四郎思慮をめぐらし曾我兄弟が難義を救
「ふ事

六之巻

本田次郎重忠の命ニよって計略の色狂ひ。時宗と
朝比奈／草摺引并ニ二の宮ノ姉方便ニ而五郎が勘
「気を免さする事

七之巻

手越の亀菊時宗ニ一言の契約。兄弟年来の
敵討并ニ大藤内兼而の意趣にてきらるゝ事

八之巻

柄柄ノ平太女に似せ御所ノ五郎丸を討取遺恨の謂

九之巻

大藤内が子藤内太夫曾我の余類へ怨をむすぶ事
禅師坊箱根の別当ノ身に替て切腹。犬房丸遠流

十之巻

曾我兄弟富士野に青面荒神といはゝるゝ事

又此五巻巳ノ二月朔日ゟ本出し申候是ニ而都合十巻也」

（総目録ウ）

（巻六封面）〈上欄〉

（「幾之巻」の枠は角を取ってある。）

▲扨お断を申上ます

一当世御伽曾我十巻

右の本久々延引申候此度も
板木出来かね申ニ付て先五巻
正月二日ゟ本出し御目ニかけ申候
残り五巻此比出来申候間則
御伽曾我　風流東鑑と
後之巻
けだいを仕リ後五巻此度出し申シ
是にて都合十巻にて御座候本
合申やうニ表紙も一色ニいたし申候
当五月迄ニ初五巻後五巻どれ
成共御買下され十巻ノ都合ニなされ
置下さるべく候五月過候ては十巻ニ仕リ
はなして五巻は売申さず候それゆへ

御断申上候

（巻六封面）〈下欄〉

巳の年
大評判　役者座振舞

付リ顔見せの献立は御馳走の喰せ者
焼物は都の桜鯛鰭のある立役

第一

付リぬれ事に命を煎鳥誰も鴨好女形

第二　指身は江戸の筋鰹其儘で生の略事
付り拍子扇小畳の生海鼠振たり六法
第三　吸物は難波の蛤口の明た若手の誇風
付り藝に為の有鯉に胡桝当つた敵役

右は三ヶの津全部三巻に仕り珍敷新評判替つた趣向に作り一両日中ニ本出し申候間御もとめ御らんなされ下さるべく候

各々様　八文字屋八左衛門

（巻十巻末・奥附）

▲扨各々様江お断申上まする
并ニ母はお針に子は色里に
傾野野郎屋に咲分色孖　全部五巻
付り父は他国に子は野郎屋に」（廿四ウ）
并ニ軍道の名将色道の睟一世の面影
義経風流鑑　全部十巻
付り主従の縁を結ぶ臣下の名題物出所の根元
并ニたはふれの色くらべ床の姿見
好色名取川　西川祐信筆　全部三巻
付り恋の歩行渡り諸袖のぬれ物　流れのうき身
右三色共ニ近日本出し申候間御しらせのため此所に書しるし申候

正徳三年癸巳二月吉日
ふ屋町通せいぐはんじ下ル町　八文字屋八左衛門新板」
（奥付）

（版組の都合上、一部／印を以て改行を示す。）

天理蔵本題簽欠。早大蔵本・名大岡谷文庫蔵本によって補うに、次の通り。

（御伽曾我）「新板絵入当世御伽曾我　幾之巻」（双辺隅入題簽）
（風流東鑑）「御伽曾我後之巻風流東鑑第一　六之巻」（双辺隅入題簽。各巻同様）

（所在）吉田幸一氏（存『御伽曾我』五巻。改装。巻一五は特に早印本。取合本合二冊）。早大（甲乙二本。並に存『御伽曾我』五巻。香色無地原装。原題簽巻一のみ欠。甲〈〈13一九五三〉印記「但馬湯嶋仲屋甚左衛門」乙〈〈13六六九〉印記「道柱」等。並に五冊。同板同印）。東大国文学研究室（存『風流東鑑』五巻。茶色無地原装。巻一のみ原題簽欠。印記「但馬湯嶋仲屋甚左衛門」「永田文庫」等。印記より見るに早大甲本の僚巻なり。五冊）

(B)　同　名大岡谷文庫蔵本

巻一欠　存九巻　〔同〕作　正徳三年正月・二月刊〔九月以降〕印（京　八文字屋八左衛門）　大九冊

利久鼠色無地原表紙。原題簽。寸法（御伽曾我巻二）二十四・六×十七・八糎。（風流東鑑）二十四・一×十七・七糎。巻一欠巻につき首目不存。版式(A)に同じ。(A)に同板の後印。刊記（奥附）に入木修訂を施す。左の如し。奥附（巻十末）終三行次の通り。

右三色共ニ段々本出し申候間御しらせのため此所に書しるし申候

正徳三年癸巳三月吉日

ふ屋町通せいぐはんじ下ル町　八文字屋八左衛門新板

右の○印を附した四字入木。巻六封面の広告はなし。

（印記）「真照文庫」等。

（備考）正徳三年正月に『御伽曾我』が、続いて二月に『風流東鑑』が刊行され、三月以降は原則として、十巻本として合印したものであろう。(A)の広告では、五月以降は前後編分売をせぬ由であるから、二月から五月の間は合印十巻本と、分売各五巻本とを両方販売したものと考えられる。本書は、原装であるにも拘らずその旨を謳った封面広告を附しておらぬ故、五月以前の印本と見るには不自然なところがある。そこで、奥附の板木をよく比較観察すると、天理蔵の『風流東鑑』(A)奥附、天理蔵『手代袖算盤』(A)奥附、そして本書の奥附、の各板木（三者同板）の間に次の順で改修が行われていることが明確になる。

天理『風流東鑑』	天理『手代袖算盤』	名大『風流東鑑』
右三色共	↓入木して「二」に改む	↓「二」ノ真中に一画を埋木して「三」に訂す
近日	↓（そのまま）	↓入木して「段々」に改む
二月	↓入木して「九」に改む	↓再び入木して「三」に改む

この結果、名大蔵『風流東鑑』は、刊月記こそ天理の『袖算盤』より早くなっているが、その実、正徳三年九月以後に遡修された奥附板木に外ならないことが実証出来る。故に今〔九月以降印〕と断定したのである。さればこそ五月以降は分売せぬ旨を告知する封面広告を附さなかったわけである。

（所在）東北大狩野（利久鼠色無地原装原題簽。存『御伽曾我』五巻。封面広告、巻頭総目録なし。貸本屋上りのツカレ本。五冊）京大国文学研究室（存『風流東鑑』五巻。茶色無地原装原題簽。奥附刊記・巻六封面広告共に無し。印面より見るに後印。五冊）

右の他、国書総目録に依れば、『御伽曾我』に江戸川乱歩氏旧蔵本、『風流東鑑』に江戸川乱歩氏旧蔵本、果園文庫旧蔵本の各本あれど並びに未見。

尚、明和四年求板の枡屋大蔵・彦太郎の蔵板目録、次いで、例えば東北大狩野文庫蔵『名玉女舞鶴』後印本等所附の、大坂和泉屋卯兵衛の再求板目録に並びに本書（前後編共）は載っているので、升屋・和泉屋と板木が転売されたことは確かであるが、今の所、升屋・和泉屋、共にその印行たる明証を存する本を見ない。

(14)(A)　百性盛衰記　　京大図書館蔵

四巻　正徳三年二月刊（京　中嶋又兵衛）　大四冊

淡褐色無地表紙原装。原題簽（巻二簽欠、巻四は下半剝落）。（隅入双辺「新板絵入百性盛衰記　幾之巻」）。寸法二十四・四×十七・

○糎。序なし。各巻頭目録一丁。目録題「百性盛衰記」。内題なし。四周単辺。無界。十行。匡郭寸法二十・一×十四・四糎。挿画セリフなし。板心八文字屋様式。巻標黒格。柱刻「百幾之巻　一（丁）」。尾題なし。各巻尾に「一之巻終」「二ノ巻終」「三之巻終」「四ノ巻終」。刊記、巻五終丁オ終行に、次の如く刻す。

正徳三年巳二月吉日　中嶋又兵衛板

（丁付）㈠目録「二」本文「三」―「七ノ十五」―「廿三」全14丁。㈡以下同様に「二」―「八ノ十六」―「廿」全11丁。㈢「二」―「八ノ十七」―「廿三」全13丁。㈣「二」―「十ノ廿」―「廿四」全13丁。

（挿画）画風は祐信風でなく寧ろ大森善清に近い。㈠四ウ五オ、廿オ。㈡四ウ五オ、十八オ。㈢四ウ五オ、十九オ。㈤四ウ五オ、廿一ウ廿二オ。

（印記）「神田本祐」「本町壱丁目唐本屋」「大」（大惣ノ印）「賢木能舎」「福田文庫」等。

（備考）初印本。保存も大体良好である。

（所在）慶大図書館（存巻二。改装。一冊）

(B)　同

〔同　同年刊〔後印〕（京　八文字屋八左衛門）〕

未見。後述の国会蔵本（求板本）の元刊記に、八文字屋の名あり。故にこゝに掲ぐ。

(C)　同

〔同　同年刊明和四年印（大坂　升屋）〕

未見。明和四年の升屋大蔵・彦太郎の求板目録に出づ。故にこゝに掲ぐ。

(D)　同　　国会図書館蔵

同　同年刊〔後印〕（大坂　早川兵助）大合一冊

茶褐色無地表紙改装。後補書題簽。寸法二十五・一×十七・九糎。(A)に同板の後印本。版式等(A)に同じ。匡郭寸法十九・七×十四・四糎。刊記次の如し。

正徳三年巳二月吉日　八文字屋八左衛門板

奥附に大坂早川兵助の蔵板目録を附す。（備考参照）。

（印記）「泉孫」「江沢文庫」「中川氏蔵」等。

（備考）(A)と同板の後印本。ただし、刊記の書肆名は、入木して「八文字屋八左衛門」に改む。巻尾の早川兵助の奥附左の如し。

世間長者気質	五冊	阿漕浦三巴	五冊
真盛曲輪錦	五冊	花楓劔本地	五冊
百性盛衰記	四冊	花色紙襲詞	五冊
丹波与作無間鐘	五冊	菜花金夢合	五冊
那智御山手管滝	五冊	雷神不動桜	五冊

書林　大坂本靱町　早川兵助板

（補説）『浮世草子名作集』（藤井乙男編）に「八文字屋版と谷村版とあり。」とせるも、誤りなるべし。谷村版なるものは未

見。「江戸時代文芸資料3」に翻刻。

本書の版式には、八文字屋板としては異例が多い。即ち、

(イ)四巻四冊という構成の異色なる事

(ロ)板下書、挿画とも、同期の八文字屋刊本とは別筆。（但、板下は一筆ではない。）

(ハ)大本で毎半葉十行という版式は他に例がない。

(ニ)挿画にセリフを附刻しない。

(ホ)各巻異例に短かい。

以上の点から、本書は中島の刊行書にして、後、八文字屋に求板されたものと見る。ただし板心の様式など八文字屋の指導下に中島に於て刊刻されたものと思われる。その八文字屋求板年次は明らかに出来ないが、寛保元年刊『魁対盃』（国会蔵本）『逆沢瀉鎧鑑』（早大蔵本）両書の末なる八文字屋の蔵板目録には本書を掲げないが、寛保三年刊『雷神不動桜』（国会蔵本）巻末の八文字屋蔵板目録には収載するから、凡そこの頃求板したものとも考えられよう。

(15)(A) 当世信玄記　　早大図書館蔵

五巻　正徳三年五月刊　（京　中嶋又兵衛）　大五冊

黒無地表紙原装。原題簽（巻二の題簽のみ残存。隅入双辺「新板絵入当世信玄記　二之巻」但、現在巻付を壱に墨訂す）。寸法二十四・八×十七・七糎。序なし。各巻頭目録一丁。目録題「当世信玄記」（各巻同）。内題なし。四周単辺。匡郭寸法二十・八×十六・一糎。無界。十一行。挿画セリフなし（非祐信風、寧ろ大森善清風）。板心八文字屋様式。巻標黒格。柱刻「信幾之巻一（丁）」。尾題なし。各巻尾「一（〜四）之巻終」（巻五はなし）。刊記左の通り。（巻五ノ廿五ウ終行に）

正徳三年巳ノ五月吉日　中嶋又兵衛板

（丁付）(一)目録「二」本文「三」―「七ノ十五」―「廿三」全14丁。(二)以下同様に「二」―「八ノ十六」―「廿三」全14丁。(三)「二」―「十ノ十九」―「廿二」全12丁。(四)「二」―「九ノ十八」―「廿四」全14丁。(五)「二」―「十ノ廿」―「廿五」全14丁。

（挿画）(一)四ウ五オ、十八オ。(二)四ウ五オ、廿一オ。(三)四ウ五オ、廿オ。(四)四ウ五オ、廿一オ。(五)四ウ五オ、廿三オ。

（備考）印面鮮新保存善良の美本。

(B) 同　　岩瀬文庫蔵

同　正徳三年五月刊同七月印。（京　八文字屋八左衛門）　大五冊

利久鼠色無地表紙原装。原題簽巻二のみ残存。(A)に同板の後印本。版式等(A)に同じ。刊記左の通り。

正徳三年巳ノ七月吉日　　板

右の内「七」の字は入木。「板」字上板木刪去。

（印記）「岩瀬文庫」等。

（備考）早大蔵『逆沢瀉鎧鑑』（寛保元年刊）等所附の八文字屋蔵板目録（管見では、八文字屋蔵板目録の最も早いもの）に既に載っている。案ずるに、篠原進氏が「未練と八文字屋」（弘前学院大学紀要十七）の中で推定された如く、中嶋によって刊

行されて間もなく、八文字屋に求板されたものでもあろうか。

尚、明和四年の升屋の求板目録、並びに、安永二年以後の和泉屋卯兵衛の再求板目録に出ているので、升屋—和泉屋と板木が転蔵されたことは疑いないが、現在迄の所、升屋・和泉屋の印本と目すべき明徴ある者を見ない。

(16)(A) 西海太平記　　岩瀬文庫蔵

五巻　正徳三年九月刊（京　中嶋又兵衛）大五冊

砥粉色無地表紙原装。原題簽（隅入双辺「新板絵入西海太平記幾之巻」）。寸法二十四・七×十五・五糎。封面に『手代袖算盤』『女男伊勢風流』『分里艶行脚』三点近刊予告。（備考参照）。序なし。各巻頭目録一丁。目録題「西海太平記」。内題なし。四周単辺。無界。匡郭寸法二十・六×十六・四糎。十二行。挿画セリフ附刻（画風は祐信風でなく寧ろ大森善清風）。板心八文字屋様式。巻標黒格。柱刻「忠幾ノ巻　一（丁）」。尾題なし。各巻末「一（〜五）之巻終」。刊記（巻五ノ廿六ウ）左の如し。

正徳三年巳ノ九月吉日

中嶋又兵衛新板

（丁付）㈠封面「初口一」目録「二」本文「三」—「十六」全15丁。㈡目録「壱」本文「二」—「六ノ十六」—「廿六」全16丁。㈢目録「二」本文「三」—「七ノ十七」—「廿八」全17丁。㈣以下同様に「二」—「八ノ十八」—「卅」全19丁。㈤「二」—「九ノ十九」—「廿六」全15丁。

（挿画）㈠四ウ五オ、十二ウ十三オ。㈡三ウ四オ、廿三ウ廿四オ。㈢四ウ五オ、廿四ウ廿五オ。㈣四ウ五オ、廿六ウ廿七オ。㈤四ウ五オ。廿三ウ廿四オ。祐信とは異る画風で『手代袖算盤』巻四五に同じ絵師かと見ゆ。

（印記）「鈴木」「不倒蔵書」等。

（備考）印面極めて鮮やかな初印本。

（封面近刊広告左の通り。）

▲扨お断申上まする

全部　手代袖算盤

五巻

付リ小宿の舛落しを遁れて夜あるきせぬ内鼠

并ニ色里の猫の皮に恐れてよりつかぬ白鼠

全部　女男伊勢風流

五巻

付リ頼まれてひかぬ気の有常が娘は勤奉公にゐづゝ

并ニ笹はらをかけらぬ疵を持た足屋の藤永

全部　分里艶行脚

五巻

付リ色狂ひの常世は梅桜松を手生の大尽

右三色共ニ近日本出来申ゆへ此所ニ書しるし候

本書は中嶋又兵衛刊となっているが、右の広告の諸書はいずれも八文字屋刊本、又は左様に推定されるものばかりであり、かつ、版式上も八文字屋の影響が濃いので、八文字屋指導下に中嶋に於て刊刻せるものであろう。詳細は篠原進氏「未練と八

文字屋」（弘前学院大学紀要十七号）等参照。

(B) 同　　東洋文庫岩崎文庫蔵

同　正徳三年九月刊〔後印〕（〔京　八文字屋八左衛門〕）　大五冊

縹色無地表紙原装。原題簽（(A)に同板）。寸法二十五・七×十八糎。版式等(A)に同じ。匡郭寸法二十・五×十六・四糎。刊記、書肆名「中嶋又兵衛」五字刪去。刊年月記と「新板」の字のみ残す。

（印記）「豊嶋伊」等。

（備考）(A)と同板であるが、印面より見るに後印。早大蔵『逆沢瀉鑑』（寛保元年刊）所附の八文字屋蔵板目録に既に所載。中嶋の刊行後、元文度以前に（恐らくは刊行後間もなくの頃か）八文字屋が求板したものと思われる。

（所在）天理（改装・断截本。題簽欠。合一冊）。国会（改装。後補書題簽。虫・汚損本・裏打。合一冊）。香川大神原〈甲本九一三、五二―十七・十九〉（巻四欠。縹色無地原装、原題簽。印記「八文字屋蔵書之印」「神原家図書記」等。存四冊。尚本書は、神原文庫目録に九一三・五二―十七及び十九として各「巻四五欠」「存巻五、一巻」と別本の如く分けて掲出されているが、由なきことにて、明らかに僚巻）。同神原〈乙本九一三・五二―十八〉（存巻三。利久鼠色無地原表紙。題簽欠。挿画は切取ってある。汚レ本、存一冊）。

(C) 同

〔同　同年刊明和四年印　（大坂　升屋）〕

未見。明和四年の升屋の求板目録に出る。故に八文字屋から升屋に売られたことは確かであるが、升屋印本とすべき明証ある本は未見。

(D) 同　　東大国文学研究室蔵

同　同年刊〔後印〕（大坂　和泉屋卯兵衛）　大五冊

縹色無地表紙原装。原題簽（(A)に同）。寸法二十四・八×十八・九糎。版式等(A)に同。匡郭寸法二十・五×十六・一糎。刊記(B)に同。巻末に和泉屋卯兵衛の蔵板目録（図版Ⅱ参照）を附す。

（印記）「副田蔵書」「天宇」等。

（備考）安永以後升屋から和泉屋に再求板された後印本。

（補説）本書と『手代袖算盤』とは同じく正徳三年九月刊であるが、本書岩瀬文庫蔵本封面には『手代袖算盤』を近刊としているので、本書の方が先に刊行されたものと推定。

(17) (A) 手代袖算盤　　天理図書館蔵

五巻　正徳三年九月刊　（京　八文字屋八左衛門）　大五冊

砥粉色無地表紙原装。原題簽（隅入双辺、外題「新板絵入手代袖算盤　幾之巻」）附絵入副題簽（備考参照）。寸法二十四・五×十八糎。序なし。各巻頭目録一丁。目録題「手代袖算盤（てだいそそろばん）」。（目録章題上に挿画を附す、備考参照）。内題なし。四周単辺。無界。十二行。匡郭寸法二十・七×十六・三糎。挿画セリフ入り。板心八文字屋様式。巻標単黒格。柱刻「算盤幾ノ巻　一（丁）」。尾題なし。各巻末「一（～五）之巻終」。巻五巻末に奥附刊記

（附広告）がある。この奥附は『義経風流鑑』と『好色名取川』の二点を広告するもので、天理図書館蔵『風流東鑑』の巻末に附せられたものと同板。但し終三行は入木による修訂がある。即ち、

右二色共ニ近日本出し申候間御しらせのため此所に書しるし申候

正徳三年癸巳九月吉日

ふ屋町通せいぐはんじ下ル町　八文字屋八左衛門新板

右の「二色」「九月」の傍圏を附した数字は入木によって修訂してある。なお、この奥附板木に就ては、『当世御伽曾我』『風流東鑑』(B)名大蔵本の項を参照されたい。

（丁付）㈠目録「二」本文「三」―「十ノ廿」―「廿五」全14丁。㈡以下同様に「二」―「十ノ廿一」―「廿六」全14丁。㈢「二」―「十ノ廿二」―「廿九」全16丁。㈣「二」―「十ノ廿三」―「卅一」全17丁。㈤「二」―「十ノ廿四」―「卅」全15丁。

（挿画）㈠四ウ五オ、廿二ウ廿三オ。㈡四ウ五オ、廿三ウ廿四オ。㈢四ウ五オ、廿六ウ廿七オ。㈣四ウ五オ、廿七ウ廿八オ。㈤四ウ五オ、廿六ウ廿七オ。なお、巻一二三の画の絵師と、巻四五の絵師とは画風を異にする別人で四五の方は大森善清風。

（印記）「浅埜氏図書」「小汀文庫」等。

（備考）各巻表紙副題簽次の通り。

（巻一）㈠八箒のわりない無心

（巻二）㈡功を積だ俵杉形

（算盤の絵）悦び烏の声は九一かあ〳〵

大名戻りのふうぞくは二二天作の御きりやう

（積俵の絵）仕合はながれ込川普請

請取物に商人の魂を入れ

（入子鉢の絵）傍から性根を入子箒

（巻三）㈢身より出る油の舛積

（舛の絵）色の道法を知る仕出しの飛脚

酒のゑい本地わすれた惣箒用

立木の高をしる言のはな

（三角測定を以て立木を男の絵をする）

（巻四）㊃人の躰を舛目に　積居風呂　（風呂桶に男の絵）

欲のくまたか尾羽を
　　からす牢人
五百目包のゆいそに
　　つながるゝ大象
こんたんに頭の
　　黒い鼠筆　（黒鼠二匹の絵）

（巻五）㊄這出は京へ追登牛引物　（牛と男の絵）

削れは八寸の
　　角れもない材木屋
後筆に上た
欲のまなこ王
いせゑびの腰を
　　かゞめる掛乞　（台の上の銀玉の絵）

又、目録章題上の挿画左の通り。

（巻一）算盤の絵（オ・ウ共）（巻二）㊀「此さし渡し二尺五寸／高サ一尺」の樽の絵㊁一辺八俵に積んだ俵の絵㊂「さし渡し二尺」の入子鉢の絵㊃「高サ二間広サ三間」の蔵の絵（巻三）㊀一辺四寸九分高サ二寸七分の枡の絵㊁広さ四百五坪の台形の土地の図㊂三角を手に持て立木の高さを測る男の絵㊃穴あき銭の裏側の絵（巻四）㊀三十間四方を百坪宛九区画に割った図㊁風呂桶に升で水を入れる男と裸男の絵㊂象の絵㊃二匹の黒鼠の絵（巻五）㊀荷を負うた牛とそれを引く男の絵㊁台上に「まわり三尺」の銀玉をのせた絵㊂㊃「拾貫目」の銀箱を四つ積んだ荷車を引く男達の絵。

（所在）東大国文学研究室（改装。奥附欠。印記「豊好」「宝文庫邦二楼」「[テ]至楽堂」「本卯／両国米沢町国広」等、五冊）都立中央加賀文庫（存巻二、一冊。香色無地原装。絵入副題簽のみ存。故紙裏打・虫損多き汚れ本。印記「大坂堂嶋しじみ橋南詰井筒屋」「本伝」「加賀文庫」等）大橋（焼失）

(B)　商人世帯薬（改題）　天理図書館蔵

五巻　〔正徳三年〕刊〔享保初頃〕修　（〔京　八文字屋八左衛門〕）　大五冊

淡縹色無地表紙改装。題簽欠。寸法二十三・七×十七・二糎。序なし。各巻頭目録一丁（新刻）。目録題「商人世帯薬付リ長者家教訓」。版式等(A)に同じなれど、一部修訂あり。匡郭寸法二十・五×十六糎。但し各巻共章題を入木して改めている。其他修訂箇所は備考参照。刊記・奥附なし。

（丁付）各巻目録（新刻）は丁付「初口」とす。

（印記）「組喜」「古本売買／広嶋播磨屋町／諸軍書類貸本／大黒屋吉兵衛」等。

（備考）修板箇所次の通り。

(イ)各巻目録新刻

(ロ)各章章題入木修訂

(ハ)板心柱題「箒盤」刪去。巻標中程を刪って双黒格に改む。

但し(ニ)の「十ノ廿」と「廿七」二丁は巻標を刪去。(五)の「廿五」単黒格のまま。

(ニ)巻三の八オ六行目「五百五十両四十四五貫目」とありしを入木して「……三十二三貫目」（○が入木）に改む。

以上の如く入木及別板修訂を施している。就中、(ニ)の修訂は注目すべき所で、かかる修正は畢竟貨幣価値レートの変動を反映したものと思われる。今右の交換率を計算すると、原刊時の「五百五十両＝四十四五貫目」は、一両＝八十匁程に当り、正徳元年鋳造の粗悪な四宝銀の価に対応している。而して、後修本の「三十二三貫目」ならば一両＝五十八匁程になり、この正徳から享保にかけての錯綜せる諸貨幣のレートの、いずれかの価を反映するものと思われる。按ずるに、正徳四年の改鋳以後の印本であろう。

(C) 手代袖箒盤　　国会図書館蔵

三巻　題八文字自笑作　〔正徳三年〕刊　〔享保初頃〕修

享保七年正月遁修　（京　八文字屋八左衛門）　大三冊

香色無地表紙改装。巻三のみ原題簽（但巻二の題簽に墨で加筆せるもの）。寸法二十四・八×十八・一糎。目録は(A)の原刊本板木を再用。本文版式(B)に同。従って板心巻標、目録のみ単黒格、本文は双黒格。柱刻も巻一三の目録のみ「箒盤」二字を存す。（巻二は「箒盤」刪去）。巻三巻尾「三之巻」の左に刊記入木。次の如し。

三之巻終　　作者　八文字　自笑㊞（鼎形に亀字）

享保七年寅ノ正月吉日　　八文字屋八左衛門板

右の作者以下及び刊年記書肆名は入木である。

（備考）印面磨損が顕著で(B)より後印なることは明らかである。一度改題し『商人世帯薬』として修印したものを、何故か旧目録を附し三巻本の如く仕立直して、刊記を入木した遁修本。故に、目録章題と本文章題とが全然異ってしまい、いかにもチグハグである。尚、「江戸時代文芸資料」(三)に翻刻されたのは、この享保七年遁修三巻本。

この享保七年という年は、長谷川強氏も「浮世草子の研究」三二一頁に指摘された如く其磧と八文字屋との間に不協和音の生じていた年であり、八文字屋は、旧作の改竄改題本を主として印行し、順調な経営とは認めがたい。一方江島屋の方も、前年享保六年迄で、八文字屋・江島屋相板刊記を有する浮世草子刊行を終っており、この間、何らかの故障が生じたものと推定される。本書の苦肉の改竄もこうした不調の糊塗策かと思われる。

(D) 商人世帯薬　　早大図書館蔵

五巻　〔正徳三年〕刊　〔享保初頃〕修　享保七年遁修

（京　八文字屋八左衛門）　大合一冊

縹色布目表紙改装。後補書題簽。寸法二十三・六×十七・四糎。目録(B)に同板。版式(B)に同じ。但、巻三末に享保七年の刊

記入木あり（Ⓒに同じ）

（印記）「梅園所庫」「饗庭文庫」「饗庭蔵書」等。

（備考）今Ⓒ(D)と配列したが、実は印面は(D)の方が早印である。本書は、五巻本でありながら巻三の末に刊記を入木してあるという変則的様態を示し、三巻通修本印行後に(B)目録を附して五巻本として印行せることが認められる。然し、国会蔵三巻本の如きは、本書より後印たることは明らかで、すると、Ⓒ(D)はどちらも並び行なわれていたものと考えられる。それは、例えば、岩瀬文庫蔵『歌行脚懐硯』（宝暦十一年刊）所附八文字屋「読本目録」には『商人世帯薬』『手代袖算盤』が並びに掲載されているところからも推定出来る。但し、右目録にはどちらも「五冊」とするので、やや事実と合わない。（右目録は宝暦九年刊『契情蓬莱山』岩瀬文庫蔵本所附同目録の修板で、『手代袖算盤』のところだけが入木で改めてある。宝暦九年の目録には、もと『鎌倉繁栄広記』十二冊が掲載されていた項である。尚、寛保元年から延享五年に至る間の八文字屋目録は、すべて『商人世帯薬』のみを掲げ『袖算盤』は出ていない）。更に、本書は、明和四年の升屋の求板目録にも『商人世帯薬』として出、その後は、赤松閣千草屋新右衛門（大坂）に転売された。即ち慶大蔵『教訓私儘育』所附赤松閣蔵板目録には「商人世帯薬／手代袖草露盤とも云全五冊」となっているから、やはり、両様の板木が伝わっていたらしい。要するに目録の板木だけを甲にしたり乙にしたりして、二種の別本の如くに見せかけて販売したものかと思われるが、何分、章題を『世帯薬』用に修してあるので、主には『世帯薬』として行なわれたのではなかろうかと考えられる。現在迄の所、升屋・千草屋印本と目すべき明徴ある本を見ない。

(18) 女男伊勢風流（伊勢風流後の三巻）愛敬昔色好　京大文学部頴原文庫蔵

(19) (A)

六巻（前後編各三巻）　題八文字自笑作〔未練作カ〕　前編〔正徳四年正月〕刊　後編〔同年三月〕刊　（〔京　八文字屋八左衛門〕）　横二ツ切六冊

浅葱色無地表紙改装。題簽欠。寸法十二・七×十九・一糎。前編巻一巻頭序一丁。序末曰「作者八文字／自笑㊞（鼎に亀字）」（序の内容備考参照）。序の次に総目録一丁（備考参照）。各巻目録一丁。目録題「女男伊勢風流（ぬんぞういせふうりう）」（一之巻～三之巻）「愛敬昔色好（あいきやうむかしおとこ）」（上之巻～下之巻）。内題なし。隅入匡郭四周単辺。無界。十四行。匡郭寸法、前編十一・一×十七・七糎、後編十一・三×十七・八糎。挿画セリフ附刻（祐信風）。板心八文字屋様式。巻標前編「一」後編「〇」。板心は巻標のみを刻す。但、㈠の5 6 12 13 27 28、㈡の4、㈤の1の各丁は巻標なし。又㈤の14の巻標は㈥の位置にあり。各丁ノド（綴代中）に長方枠を設け、巻付丁付略題を刻す。（前編巻一「いせ一巻（丁）」同巻二三「幾巻いせ（丁）」後編「四（～六）巻男（丁）」但、製本時に過半断截されてあって、丁数字までは確認不能）。尾題なし。前編各巻末「一（～三）之巻終」後編各巻末「上（～下）之巻終」。刊記なし。

（丁付）未確認。各巻丁数㈠30丁㈡29丁㈢30丁㈣29丁㈤28丁㈥28丁

（挿画）実丁数を以て示す。㈠5ウ6オ、12ウ13オ、20ウ21オ、27ウ28オ。㈡3ウ4オ、12ウ13オ、19ウ20オ、26ウ27オ。㈢3ウ4オ、11ウ12オ、19ウ20オ、27ウ28オ。㈣3ウ4オ、10ウ11オ、18ウ19オ、26ウ27オ。㈤3ウ4オ、10ウ11オ、17ウ18オ、24ウ25オ。㈥3ウ4オ、10ウ11オ、17ウ18オ、25ウ26オ

（印記）「一行千里道未読万巻書大雅武蔵石浜増戸文庫」等。

（備考）序文左の通り。

序

戯言も思ふより出。一句のおかし言も人さまの心を慰る種共なれかし。是せめては三仏乗の因。後世しらずとよばるゝ此古入道。久しく鶴翁の遺冊を懐て。かれこれ書つらねけるに。世には物むつかしき人あり。それも是も他の筆をかりて。我名を顕すといへり。されば同藝相ねたむならひとは侍れ共。是又糸竹の道にもあらず。生兵法のふでてんがう。藪薬師の手柄語。いけずのよねの」（序オ）客よばゝり。儒者の堅い自慢。世間法師の受売談義。いづれかそしりの種ならんはあらざりき。今いせ物語の六のまき。北の窓をたてゝ。嵐をふせぎしつれ〳〵にとゝのひぬ。恥なり〳〵兎園の策。世に喧嘩の中買あらば。予は道をよけてあらそふ事をまぬかれ木で作りし鶏の時もつくらねば。蹴爪も生のまゝに幾久しく。筆さきにて御意得ねばならぬで。ござりますと尓曰

作者八文字自笑㊞

（前編巻首総目次の通り。）

并ニ色里へ当もなふ行平は須广の磯ぜゝり

女男伊勢風流　六巻

付リ瓜の蔓ニ茄子はならず者に業平の寡世帯

初三巻目録

一の巻　初かぶりの百両は
　　元来色の道のすき額

二の巻　松風村雨のふつてわいた
　　難波の勤奉公

三の巻　色事に筑紫がたより
　　是迄が終の徒宿

是迄三巻先此度本出し申候間
御もとめ御覧可ヒ下候」（総目オ）

并ニ恋の中山世間の鐘を撞出し女郎

伊勢風流
後の三巻　愛敬昔色好

付リ曲輪の栄花一生其むきで融の大尽

続の目録

四の巻　海道筋の好色を
　　かき集て図に乗た駒ざらへ

五の巻　三谷通ひの二梃立を
　　押て勝手のあはぬ奥筋の色遊

六の巻　都の嶋原祇園に蒔ちらす
金銀はあたかも石川原の院

此三巻　本出し申候是に而都合六巻也」（総目ウ）

右は文面から見るに、正確には総目録というよりも広告板木を流用したものと見た方がよい。而して、終行「此三巻」の下に二格を空しくしているのは、必ずや元「近日」なり「来月」なりの文字があったのを削去せる痕跡に違いない。ここに然るべき字を刻せる原板木を印せる例は未だ見ないが、本書の如きは、後編が既刊になったためにかく削去せるものと認められるから、即ち、両者共揃って後の合印本なるべき事が分る。

扨、本書刊年については、刊記のある本を未だ見ないので、推定で頭書の如くした。長谷川強氏の「浮世草子年表」では直に「正徳四年正月刊・三月刊」としておられるが、刊記ある本を見られたのであろうか。所見では、正徳四年二月刊役者評判記『役者色景図』（歌舞伎評判記集成㈤所収）に「女男伊勢風流　六巻／此度初三巻正月二日より本出し置申候／よみ本さしあいなし後三巻近日に本出し候」とし、又、「伊勢風流後の三巻愛敬昔色好／此三巻四五日中に本出し申候」と謳った広告を附しているから、凡そ、正月刊・三月頃刊と見てよいのではないかと考える。

尚、早大蔵『逆沢瀉鑑』（寛保元年刊）所附の八文字屋蔵板目録には「女男伊勢風流　三冊」「愛敬昔色好　三冊」と別に掲出し両書が分売されていたらしいことが窺われる。しかし、東北大狩野文庫蔵『薄雪音羽滝』（寛保三年刊）所附の八文字屋目録では、この両書を「合六冊」とし各「戌ノ年出し」と注記する。この前年寛保二年が戌年であるから、案ずるに、寛保二年に、合印六冊本として装訂を新たにして売出したというようなことではないかと思われる。京大顎原文庫蔵本は、印面に磨損せる処が散見し、或いはこの、寛保度の後印本ではないかと疑われるフシもある。

（所在）リチャード・レイン氏報告にはケンブリッジ大蔵本として「女男伊勢風流、三巻、正徳四年正月／愛敬昔色好、三巻、同年三月〔以上両者の刊年は長谷川強氏の研究による〕」と記録されている。この書き方からするとやはり無刊記本であろう。未見につき詳細は未詳。東北大狩野（所見本前編三巻。浅葱色無地〔原表紙カ〕後補書題簽。無刊記。早印。合一冊）都立中央特別買上文庫（存後編上中巻。利久鼠色無地原表紙。題簽欠。上巻前半16丁欠。印記「蜂屋文庫」。合一冊）

(B)　愛敬昔色好　　早大図書館蔵甲本（〈13 1422）

三巻〔未練〕作カ〔正徳四年三月〕刊〔明和四年〕印〔大坂　升屋カ〕横二ツ切六冊

利久鼠色無地表紙原装。第二冊と第四冊に原題簽（隅入双辺「愛敬昔色好」巻付なし）。上に茶色覆表紙。寸法十二・九×十九・四糎。(A)の後印本。版式(A)に同じ。匡郭寸法十一・二×十七・八糎。無刊記。

（備考）全三巻を六冊に分冊している。その様態は次の如し。

（第一冊）上巻目録～第15丁迄

（第二冊）上巻第16丁～終丁

（第三冊）中巻目録～第14丁迄
（第四冊）中巻第15丁～終丁
（第五冊）下巻目録～第13丁迄
（第六冊）下巻第14丁～終丁

以上の如く分冊してある。本書は、京大林文庫蔵『傾城竈照君』所附升屋求板目録では、「男女伊勢風流 横本六冊」「愛教（ママ）昔色好 同六冊」とし、早大蔵『日本契情始』所附升屋求板目録では「男女伊勢風流横本五冊」「愛教（ママ）昔色好 同六冊」とする。前編の冊数に怪しむべき所があるが、いずれにせよ、各編五冊乃至六冊に分冊して発売したことが分る。今早大蔵本を検するに、印面漫漶せる処尠なからず、しかも六冊分冊本となっている。題簽も、外題のみで巻付は削去したと覚しく、要するに、升屋の名はどこにも見えないが、まず升屋印本と見てよいものであろう。

（所在）早大乙本（ヘ13 1745、改装、中巻第6 14 15 28の各丁欠。甲本と印面同然。印記「亀谷」「饗庭蔵書」「饗庭文庫」等。合一冊）他に東北大狩野（後編）江戸川乱歩氏旧蔵の両本があるが、前者は貸出中の由にて閲覧出来なかった。後者も未見。尚、国書総目録には、「京大、京大穎原」と並記してあって、穎原文庫以外にも京大に蔵本のある如くであるが、調査の結果では、そうした形跡はない。穎原文庫蔵本の重出かと思われる。

(C) 時代通物語（改題）

四巻 〔正徳四年〕刊天明四年修（改題改竄） 横二ツ切
四冊

未見。中村幸彦氏の「八文字屋版木行方」（近世小説史の研究所収）には、「天明四辰の初春の序ある『時代粋噺』（内題『時代通物語』）四巻は、『女男伊勢風流』同続編『愛敬昔色好』を細工したもの」と説かれ、長谷川氏は、「天明四年正月／時代通物語 横本四冊／序題は右の如く、目録題は『時代通物語』、外題・尾題及び巻四内題は『時代粋噺』。序に『天明四辰の初春』。所見本刊記なし。『愛敬昔色好』（正徳四年三月刊）を改題、章題などを改め四冊に改編したもの」と解説された。（浮世草子年表）。レイン氏報告には、ケンブリッジ大蔵本として次の如く著録。「時代通物語 四巻 刊記ナシ／右は巻一の内題也。他の三巻に『時代精噺』（ママ―論者注）とある。右書の巻一、三、四が『愛敬昔色好』の上、中、下、それぞれの改題本也。巻二は補也。其の初は、『越前三国并に出村女郎の事、馬駕をならべて加州の小松云々。』（劔橋本は『女男伊勢風流』と一緒に合本になって居る。）」未見につき詳細は未詳。

(20) (A) 風流詫平家

京都府立資料館蔵

五巻 題八文字自笑作〔未練〕作カ 正徳五年正月刊
（京 八文字屋八左衛門） 横二ツ切五冊

香色無地表紙原装。表紙中央に原題簽（無辺「風流詫平家」）幾之巻」）。寸法十三×十九・七糎。封面に『役者懐世帯』の既刊広告。（備考参照）。序一丁。序末左の通り。

正徳五年未ノ正月吉日　作者八文字　自笑 ㊞（鼎に亀字）

次に『風流詫平家』『義経風流鑑』合十巻の総目録一丁（備考参照）。その次に各巻目録一丁。目録題「風流詫平家」。内題なし。四周単辺（隅入匡郭）。無界。十四行。匡郭寸法十一・一×十七・七糎。挿画セリフ附刻（祐信風）。板心八文字屋様式。巻標黒格。柱刻「風流一ノ巻　一（丁）」（巻二以下は巻付の「ノ」字なし）。尾題なし。各巻末に「一之巻終」「二ノ巻終」「三之巻終」「四之巻終」（巻五なし）。刊記（巻五の卅五丁末）次の如し。

正徳五年未ノ正月吉日
ふ屋町通せいぐはんじ下ル町　八文字屋　八左衛門板

（丁付）㈠序「初口」総目録「一」目録「二」本文「三」―「九ノ十九」―「廿九」全20丁。㈡目録「二」本文「三」―「十ノ廿」―「卅二」全21丁。㈢以下同様に「二」―「十一ノ廿一」―「卅四」全23丁。㈣「二」―「十二ノ廿二」―「卅五」全24丁。㈤「二」―「廿ノ卅」―「卅五」全24丁。

（挿画）西川祐信なるべし。㈠四ウ五オ、廿ウ廿一オ、廿六ウ廿七オ。㈡四ウ五オ、廿ウ廿一オ、廿八ウ廿九オ。㈢四ウ五オ、十一ノ廿一オ、廿六ウ廿七オ、卅二オ。㈣四ウ五オ、十一オ、廿七ウ廿八オ。㈤四ウ五オ、十オ、十六ウ十七オ、卅二ウ卅三オ。

（印記）「京都近忠」「浮世文庫」等。

（備考）封面所附の『役者懐世帯』広告次の通り。

未ノ年（右半破損）（以下破損）
大評判　役者〔懐世帯〕（以下破損）
付り内外の時花子は親方の銀箱（以下破損）

第一京白粉所つやをいふ座本の口上
付り悪口の根本はわらを焼釜元
第二江戸寄元結引しめた実事の誇風
付り旅芝居を九廻り本舞台のたて者
第三難波梅花油ねって出る嘉例の六法
付り楽屋の外聞は顔見せの花の露
右は三ケの津新評判珎敷趣向に作り
正月五日ゟ本出し申候此方の名を
御ぎんみなされ御もとめ可ヒ下候以上

各々様　八文字屋　八左衛門

（巻一巻首総目録左の通り。）
義経風流鑑の前

風流詫平家　五巻ノ惣目録

并ニ緋縮緬の赤鑌は先陣の抜懸遊
付り無息酒の助勢は後詰の白人駕

一ノ巻　小督と常盤は色替ぬ若後家
付りなんばの次郎は宿もとにちゑを置て来た男

二ノ巻　重盛と宗盛は位詰の大尽職
付りもんがく上人の奉加帳に狼も恐るゝ荒僧

三ノ巻　祇王と祇女は墨に染ても白拍子
付り俊寛僧都は東山の借座敷酒好の亭坊

四ノ巻　長範と弁慶は物喰のよい坊主客
付り鬼一法眼が兵法のゆだんは疵の付た娘

五ノ巻　熊野と朝臣は気のしほれぬくるは勤
付リ清盛入道の火の病は水のへりし火動の症
右五巻未ノ正月二日ゟ本出し置申候」（総目オ）
風流花平家の後

義経風流鑑　五巻ノ惣目録

一ノ巻　軍道の名将色道の粋一ッ世の面影
付リ旦那に廻臣下の名題者出所の根元
後家育の甘さが佐藤継信忠信
付リ吉次兄弟が至りは須弥山より高金山の恩
二ノ巻　朝込に惚て口を開た鈴木亀井
付リ源八兵衛は女房の心を突てみる手管の鎧遣
三ノ巻　大盃を押られて御馬を鉦喜三太
付リわしの尾の三郎はめつた抓たがらぬ新参の律義者
四ノ巻　郷の詞の尻馬は下心の武蔵坊
付リ権の守兼房は悪性の異見して鬢髭も白鼠
五ノ巻　仙人の術は無性に飛揚の戒存
付リいせの三郎は指のまたをひろげて衣川の力業
又此五巻未ノ正月廿日ゟ出し申候是ニ而都合十巻也

（備考）白っぽい良質の料紙に刷る。印面も新しく、総目録末の予告時日の文面よりしても、本書は、正徳五年正月に刊行された初印時の一本と認められる。少くも『義経風流鑑』（同年四月刊）刊行以前の早印本たることは動かない。但し、全体に手擦れ等による汚損が少なくないことが惜しまれる。

（所在）国会（改装。序欠。総目録京都府立蔵本に同。料紙も同然。巻二の卅二、巻四の卅三以下、巻五の卅五、の各丁欠。しかも、その巻二五終丁の欠に補うに『義経風流鑑』の巻二四終丁を以てし、完本の如く見せかけるという不埒なごまかしをした本で、勿論、後世の古本屋などのさかしらに出るものであろう。又、巻五奥附に『好色一代能』の広告（→『義経風流鑑』東大霞亭蔵本の条下参照）を附せるも、右の手を加えた何者かが、ついでにここに取合せたものであろう。印記「花豊」等。合一冊）。

（補説）本書と『義経風流鑑』とは前後編合十巻をなすので本来一項に並べて扱うべきかとも思うが、今の所、其十巻合印本と認むべき者を見ない。又、寛保元年から宝暦十二年に至る迄の八文字屋諸蔵板目録、更には之を求板せる明和四年から安永元年に至る升屋の蔵板目録等いずれの目録に於ても全然別書として掲載され、前後編合印販売したものとは必ずしも認めがたい。故に今便宜上別々に取扱うこととする。

(B)　同　　東洋文庫岩崎文庫蔵

同　題同作〔同〕作カ　正徳五年正月刊同年四月以降印

（京　八文字屋八左衛門）　横二ッ切合二冊

香色無地表紙原装。原題簽（巻二五の分。表紙中央に貼付）。首目(A)に同じ。但、総目録ウ終一行修板。即ち次の如し。

右五巻此度出し申候是ニ而都合十巻也

右の傍点部入木。版式・刊記等(A)に同。

（備考）総目録末の修訂は、当該書が既刊になった為にかく訂

したものと見えるから、本書は『義経風流鑑』（同年四月刊）刊行以後に於ける再印本であろう。(B)本には、封面の『役者懐世帯』広告を附さぬ事もその一傍証である。但し、印面は大して遜色ないから、ずっと下る後印本というのではない。

（補説）右の外、明和四年升屋の求板目録に掲載されるから、升屋の印本もある筈であるが未見。国書総目録には外に東博、九大（巻二欠、四冊）、ケンブリッジ大学（レイン氏報告所掲「正徳五年」とのみ注記。詳細不明）の各本を著録するが、並びに未見。

(21)(A)　義経風流鑑　　国会図書館蔵

五巻　題八文字自笑作〔未練〕作カ　正徳五年四月刊

（京　八文字屋八左衛門）　横二ツ切合二冊

丹表紙改装。後補書題簽。上に渋引布目覆表紙を施す。寸法十二・六×十九・七糎。封面に「義経風流鑑五巻ノ惣目録」（「風流詫平家」巻頭に所附の総目録ウラと同板、但終一行修、備考参照）。序一丁、序末左の如し。

作者八文字
自笑㊞（鼎に亀字）

正徳五年未ノ卯月吉日

各巻巻頭目録一丁。目録題「義経風流鑑」。内題なし。四周単辺（隅入匡郭）。無界。十四行。匡郭寸法十一・一×十七・六糎。板心八文字屋様式。巻標双黒格。柱刻「義経一ノ巻　一（丁）」（巻二以下巻数下の「ノ」字なし）。挿画セリフ附刻。尾題なし。各巻尾「一（～五）之巻終」。刊記（奥附「百人女郎品定」近刊広告―備考参照―の奥に）

正徳五年未ノ卯月吉日

八文字屋
八左衛門板
各々様

（丁付）㈠序「口一」目録「二」本文「三」―「廿ノ卅」―「卅三」全23丁。㈡目録「二」本文「三」―「廿ノ卅」―「卅五」全24丁。㈢以下同様に「二」―「廿ノ卅」―「卅二」全21丁。㈣「二」―「廿ノ卅」―「卅四」全23丁。㈤「二」―「廿ノ卅」―「卅四」全23丁。

（挿画）祐信風。水谷不倒氏『古版小説挿画史』に西川祐信の画と認定された作品の一つ。㈠四ウ五オ、十オ、十五ウ十六オ、卅一オ。㈡四ウ五オ、十オ、十六ウ十七オ、卅三オ。㈢四ウ五オ、十オ、十五ウ十六オ、廿ノ卅オ。㈣四ウ五オ、十オ、十六ウ十七オ、卅三オ。㈤四ウ五オ、十オ、十六ウ十七オ、卅二ウ卅三オ。

（印記）「好文堂」等。

（備考）下冊に総裏打を施し全般に手擦の多い本で保存は余り良くない。封面総目録の終一行左の通り。

此五巻未ノ卯月七日ゟ出し申候是二而都合十巻也

右は、『風流詫平家』(A)に於ては「又此五巻未ノ正月廿日ゟ出し申候是二而都合十巻也」とあったが、その「又」字を削り、「正」「廿」を各「卯」「七」に入木して改めたもので、恐らく、この「卯月七日」が本書の刊行日であろう。その後、右の一行は「右五巻此度出し申候云云」と入木して改められてしまうのであ

る。

（次に巻二の奥附近刊広告次の通り。）

▲お断申上まする正月ゟ出し置キ候

姪楽勧進能三日仕リしばらく相休

此次三日の外題は

并ニ手生の妄者を油断なく

暮六ッより初り

好色一代能　全部三巻

付リかゝへの小性共を懈怠なく

雨天ニ而も仕り候

右来月ちがいなくいたし申候

御らんなされ可ヒ下候

各々様

八文字屋

〔八左衛門〕（破損）

（次に巻四奥附近刊広告左の如し。）

▲扨お断申上まする

并ニ母はお針に子は色里に

野傾咲分色孖　全部五巻

付リ父は他国に子は野郎屋に

分里艶行脚　全部五巻

付リ色狂ひの常世は梅桜松を

手生の大尽

右二色共に近日出来申候おしらせのため

此所に書しるし候

各々様

八文字屋

八左衛門

（巻五奥附広告・刊記）

▲扨お断申上まする

并ニ花奢育の息女は附子の鶯笛

百人女郎品定（桐唐草紋行成表紙本の絵柄）

付リ風流造の遊女は実生の禿菊

右は一切女中の風俗有識世俗故事因縁

当世古風のわかちを文談仕り尤さしあいなし

西川筆ニ而御たしなみ草紙にいたし

追付出し申ゆへ御しらせのため書印申候

正徳五年未ノ卯月吉日

各々様

八文字屋

八左衛門板

この『百人女郎品定』広告板木は、後に享保元年に至って『分里艶行脚』刊行時に修訂の上流用される

（所在）東大霞亭文庫（香色無地表紙原装。原題簽〈無辺「義経風流鑑　幾之巻」〉表紙中央に貼付。封面総目録は終一行を「右五巻此度出し申候是ニ而都合十巻也」に修す。故に国会蔵本に比すれば第二次の印本なり。但し保存状態は霞亭本がまさる。五冊。印記「三州挙母竹生町春日谷」「霞亭文庫」等）。広

島大国文学研究室（改装。巻二三四原題簽。封面・奥附・広告等一切なし。巻一目録欠丁。印面かなり磨耗が顕著で、或いは(B)の升屋印本かと見ゆれど、確証なきまま、仮にこの所に配す。印記「水谷文庫」。巻五裏表紙見返に水谷不倒氏の筆で「奥附を欠きたれども五巻にて完結」と墨識語。五冊）。香川大神原（改装。存巻一。初印本なれど端本にして汚擦損多し。印記「神原家図書記」等。一冊）

(B) 同　　天理図書館蔵

同　題同〔同〕作　正徳五年刊明和四年印　（大坂　升屋大蔵）　横二ツ切合一冊

淡香色無地表紙原装。原題簽（巻一の分）寸法十三×十九・一糎。封面なし。版式(A)に同。匡郭寸法タテ十一・一糎（ヨコ計測不能）（同板後印）。巻五巻末奥附左の如し。

此所ニ御断申上候
一京都八文字屋方ニ而往年ゟ
罷売弘候読本類此度私方江
悉求板仕候間不相替御求御覧
可ヒ下候且又如先例之来春ゟ
年々新作読本出し申候間
御求御覧之程奉頼上候已上
明和四丁亥年
正月
大坂心斎橋順慶町角
板元　　升屋大蔵
京寺町通押小路下ル
売所　　金屋治助
江戸大伝馬町
同　　鱗形屋孫兵衛

（印記）「平善」「兎角菴」等。

（備考）印記よりして果園文庫（兎角菴）旧蔵本。本書は、升屋の求板目録には掲載するが、その後の和泉屋、早川、千草屋、菱屋治兵衛等の蔵板書目には出ていないので、升屋以後の帰趨は未詳。

(22) 名物焼蛤　　東北大狩野文庫蔵

五巻〔正徳頃〕刊　無刊記　（〔京　八文字屋八左衛門〕）

大五冊

香色無地表紙原装。原題簽（巻四・五のみ残存、隅入双辺「新板絵入野沢名所焼蛤　幾」→慶大蔵本の項参照）。寸法二十五・二×十七・三糎。序なし。各巻頭目録一丁。目録題「名物焼蛤」（目録題下「巻之一（二）目銀」と誤刻、巻三四五は目録題にルビを振って其下四格を隔てて「巻三（〜五）目録」と刻す→備考参照）。内題なし。四周単辺。無界。十一行。匡郭寸法二十・一×十四・三糎。挿画セリフなし（備考参照）。板心粗黒口、多く左の如し。

巻二以下は、中縫に八文字屋様式の巻標を挿み、巻標は黒格。（但し板心には不斉が目立つ→備考参照）。尾題「名物焼蛤　三之巻終」「名物焼蛤巻五終」。跋、刊記、奥附、広告等なし。

（丁付）㈠目録「一」本文「二」―「十ノ十五」―「初十七」「十七」「十八」「廿」（「十九」なし欠丁に非ず）―「廿三」全18丁。㈡「一」―「十七」全17丁。㈢目録「目録」本文「一」―「十七」全18丁。㈣目録「目録」本文「一」―「十七」全18丁。㈤目録「一」本文「二」―「十八終」全18丁。

（挿画）㈠*三ウ四オ、八オ、*十七ウ十八オ。㈡*四ウ五オ、十オ、*十四オ。㈢三ウ四オ、九オ、十四ウ十五オ。㈣二ウ三オ、七オ、十オ、十四オ、十五ウ十六オ。㈤*四ウ五オ、十ウ十一オ、*十五ウ十六オ。今右肩に＊印を附したものと、さならざるものとは画師を異にすると見られ、＊の方は、やや大森善清に似た風があり、無印の方は、祐信風を学んだかと思えるが拙劣な絵師である。

（印記）「浅清」「長」（米俵ノ内ニ）等。

（備考）本書は版式上の不斉整が著しい。以下、之を挙げる。

㈠目録題の形式。巻一二は「目銀」と誤刻し、巻三四五は、目録題の下「巻幾」までの間が不自然に空いている。巻三以下などを見ると目録題は入木の如し。

㈡挿画に二様の画風が認められ、その一方は大森善清に似、他方は、余り類例を見ない極めて拙劣な絵である。

㈢板心の黒口は八文字屋の本として極めて異例である。そのうえ、㈠の一、㈢の四、㈣の七、九、十一、㈤の四、五、十五の各丁は魚尾に相当する部分に「八」と陰刻し黒口の形も統一がとれていない。例えば㈢の三、四、㈣の七、十、㈤の十、十一、等の各丁は上下いづれか又は両方共魚尾相当部分なき大黒口であるなど、一々枚挙にたえぬ程錯雑している。又巻標も、㈢㈣の目録は双黒格を以てせるなど、殆ど丁毎に板心の形式を異にしているといってよい位である。

㈣尾題も巻三のみ、異様な大字で刻す。

㈤板下筆者も二筆乃至三筆あるかと見える。

これらの諸条から推定するに、本書は八文字屋の刊刻本とは思えない。しかし、寛保元年から、宝暦十二年に至るまで、八文字屋の蔵板目録には常に掲載されているから、八文字屋が一貫して印行していたことは疑いない。それについて、所見の諸本、すべてに序も刊記もなく、刊者・刊年を特定すべき手掛りに乏しいのであるが、板心に時に陰刻される「八」字は、八文字屋のマークでもあろうかと推定する。結局、他書肆の刊刻本を求板し改題等施して自家新刻書として巻標を入木して売ったとかいうような可能性も一概には否定出来ないのである。版式上の不斉整、無刊記、無序なること等、かれこれ疑問の少なからぬ一書である事を指摘しておきたい。（この点はすでに長谷川強氏の「浮世草子の研究」に指摘がある。）

（所在）都立中央加賀文庫（改装。元題簽貼付。印記「政證」「幸堂私印」等。五冊）。国会（改装。天地断截一部裏打。巻二

の十四、十五2丁欠。印記「このぬしせんくわ」「樒原家蔵」等。合一冊)。東大国文学研究室(茶褐色無地表紙原装。原題簽。巻一〜四は所見本中最も刷りの良い早印本であるが、巻五のみは遙かに下る後印本の配補にしてしかも尾五丁欠。全体にツカレ本。五冊)。早大(香色無地表紙原装。原題簽。印記「饗庭文庫」「饗庭蔵書」等。五冊)。筑波大(香色無地表紙原装。原題簽。存巻一・五、二冊)。以上六本は、早印本。以下後印本。東大霞亭文庫(改装。印記「本伝」「五忠」「中子慶蔵之記」「霞亭文庫」等。五冊)。慶大(利久鼠色無地表紙原装。原題簽「新板絵入野沢名所焼蛤　一」巻二四五同上、「新板絵入乃佐和名所やき蛤三」。印記「大野屋」(大惣)「平出氏書室記」「兎角菴」等。五冊)。香川大神原(存巻一。香色無地〔原表紙〕題簽剝落。五六七九の各丁は別印本の配補。印記「大森蔵書」「神原家図書記」等。一冊)。岩瀬文庫(改装。印記「米沢新町穀屋」等。五冊)。京大国文学研究室(改装。所見各本中最も印面の悪い後印本。恐らく江戸後期印と推定される。合一冊)以上後印各本は、霞亭文庫、慶大、神原文庫各蔵本を比較的早印とし、岩瀬文庫蔵本や京大蔵本は、更に後印の漫漶甚しい後印本。

本書は、升屋、和泉屋、千草屋、早川、菱屋の各求板書目に見えないが、長谷川氏の年表によると、安永二年正月修印『世間用心記』巻末なる菊屋七郎兵衛の目録に掲載されている由である。今、右の京大蔵本など、或いはこの菊屋印本かと疑われるが確証を得ないので、仮にすべて一項中に収めた。尚、国書総目録著録諸本の内、東博、芸大、北大、ケンブリッジ大(レイン氏報告に「正徳頃か」と注記、されば、やはり無刊記なるべし。詳細不明)の各蔵本は未見。

(補説)本書は、『日本小説書目年表』では享保十九年刊とされ、国書総目録も之に従ったが、中村幸彦氏の夙に看破された如く国会図書館蔵本の巻二巻末書入によった誤りである。(「其磧自笑確執時代」近世小説史の研究所収参照)。

(23) 当流曾我高名松　　国会図書館蔵

五巻〔正徳頃〕刊　(〔京　八文字屋八左衛門〕)　無刊記　大五冊

水色無地改装表紙。後補書題簽。原題簽は各冊見返に貼付て保存(隅入双辺「新板絵入当流曾我高名松　幾」)。上に帝国図書館の茶色覆表紙。寸法二十四・六×十六・七糎。序なし。各巻頭目録一丁。目録題「当流曾我高名松」。内題なし。四周単辺。無界。十一行。匡郭寸法二十×十四・六糎。挿画セリフなし。(祐信風にして二筆あるか)。版心粗黒口『名物焼蛤』に同形式。上魚尾に当る所に「八」と陰刻。中縫に巻標を付す、双黒格。柱刻「幾ノ巻一(丁)」。(版心については備考参照)。尾題なし。各巻末「一ノ巻終」「二の巻終」「三巻終」「四之巻終」「五ノ巻終」。跋、刊記、広告等なし。

(丁付)㈠目録「一」本文「一」―「七ノ十二」―「廿二」全17丁。㈡以下同様に「一」―「九ノ十三」―「廿一」全17丁。㈢「一」―「八ノ十一」―「廿一」全18丁。㈣「一」―「十一ノ十六」―「廿」全15丁。㈤「一」―「八ノ十四」―「廿二」

全16丁。
（挿画）概して祐信風であるが、祐信その人と見ることは出来ない。しかも仔細に見ると巧なる者と拙なる者と二人の筆を交えるようである。㈠三ウ四オ、十四オ、十九オ。㈡三ウ四オ、九ノ十三オ、十九オ。㈢三ウ四オ、十三オ、十九オ。㈣三ウ四オ、九オ、十八オ。㈤三ウ四オ、十五オ、廿オ。
（印記）「式亭」「三馬」「好文堂」等。
（備考）印面も鮮やかで、虫損・裏打等を存しない美本。所見本中の最善本。
本書の版心については下の如き不斉が見られる。
㈠の十六、十七、㈡の二、十五、十六、㈢の二、十九、㈣の二、十九、廿、㈤の二、の全十一丁は板心の「八」字陰刻なし。
㈤㈣の二、三、七、八、の四丁は巻標なし。
右の如く不斉が散在するが、『名物焼蛤』の様な甚しい乱雑さは見られない。寧ろ、よく斉っているといってもよい。ただ、板下書にしても二筆を交えることは明らかで（例えば巻五の一、二の両丁など顕著な別筆）、絵師も二人いるかと見られるなど、尚、不統一なところは目につくのである。案ずるに、書誌上『名物焼蛤』と本書とは極めて親しい出自にかかるものと認められるが、本書の方が斉整なることからすれば、後に刊行されたものかと推定出来る。
（所在）早大甲本〈〈13＊一六五四〉（改装。古本屋上りの裏打ツカレ本。早印。印記「衣棚二条本重」等。合一冊）。早大乙本〈〈13一六二八〉（改装。全般に版面が傷んでいる。後印本。印記「相三」「八文字屋蔵書之印」「饗庭文庫」等。合一冊）。この外に国書総目録には、京大頴原（巻四、一冊）とあるが未見。
（補説）所見本すべて序も刊記もない。が、寛保元年から宝暦十二年に至る迄八文字屋の蔵板目録に常に収載され、なお板心に「八」字を刻することから、一応八文字屋の刊本と認める。案ずるに㉒㉓は、『頼朝三代鎌倉記』などと同じ頃の刊本か。（正徳二年頃）
本書は後、明和四年の升屋求板目録に載るから、升屋に求板されたことは確かであるが今の所升屋印本と目すべき明徴ある本を見ない。升屋から後はどこへ転じて行ったか明らかに出来ない。（和泉屋、早川、千草屋、菱屋各目録に不載）

大坂御書物所　松寿堂藏板目録

しんさいばし南二丁目角　ますや　渋川彦太郎

肩衰占 神易選	一冊	絵本錦臺笙	近日出来 十冊
尾卜占		興武家盛衰記	十冊
當物神易選	近日出来 一冊	彩色画選	三冊入
本朝人相考	近日出来 二冊	彩色畫読	近日出来 三冊
太坂寺社順拝記	一冊	絵本源氏山	三冊
上洛雖波 祭礼大行列記	一冊	絵本鎌倉山	三冊
住吉社細見絵図	一帖	絵本法名定	近日出来 五冊
（墨訂）		絵本寿帖	近日出来 三冊
諸礼手引種	一冊	女筆初瀬川	三冊
寺子万宝全書	近日出来 十冊	女国教帖	近日出来 一冊
大船師用字林大成	一冊	女尺譜艶文組	近日出来 一冊
大象師用大蔵	一冊	女今川 半紙本	近日出来 一冊
六今徳色紙形	一冊	女今川教文	一冊
今川 ほそ徳田書	一冊	伊勢物語教訓文	二冊
教訓今川状 大橋	一冊	花王い世物語	一冊
新増古状揃	一冊	伊勢物語女訓大全	近日出来 一冊
字林用文悉改綱目	近日出来 一冊	百人一首九重錦	近日出来 一冊

I —（A）

今川一睫記	五冊	風流軍配圏	五冊
風流庭訓往来	五冊	互先碁盤忠信	五冊
風流宇治糸政	五冊	敵行脚懸硯	五冊
於国哥舞妓	五冊	清明白狐王	五冊
風流東大全	五冊	當流増我高名松	五冊
奥州軍記	五冊	日本傾性如	五冊
長生伏木隠	五冊	當世信玄記	五冊
萬福富貴自在	五冊	百姓盛衰記	四冊
今昔九重櫻	五冊	商人世帯薬	五冊
風流軍配圏	五冊	世間長者形氣	五冊
時勢富貴形氣	近日出来 五冊	世間貧賤形氣	近日出来 五冊
今昔自慢形氣	近日出来 五冊	善悪両面常盤染	五冊
忠孝壽門松	五冊	丹後与作無間鐘	五冊
武遊双紙巴	五冊	忠盛祇園桜	五冊

I —（C）

女筆我兄弟鏡	五冊	龍都徳系圏	五冊
女將門七化粧	五冊	鬼對盃	五冊
風流粲花形	五冊	敦盛源平桃	五冊
花競清水詣	五冊	大内裏大友真鳥	五冊
苅萱二面鏡	五冊	彩色哥相撲	五冊
女非人綴錦	五冊	盛久側柏葉	五冊
記録曽我	五冊	義貞艶軍配	五冊
真盛曲輪錦	五冊	昔女化粧櫻	五冊
教訓廓馴語	近日出来 五冊	十二小町賦裳	五冊

I —（B）

奴情蓬莱山	五冊	陽炎日高川	五冊
富士浅間裾野桜	五冊	柿本人丸誕生記	五冊
出世振虎苴語	五冊	本朝會稽山	五冊
名玉女舞鶴	五冊	楠三代壮士	五冊
御伽平家	五冊		

I —（D）

録目類本譜候弘賞馴申と物屋字文八

風流扇軍　五冊
北條時頼三女櫻　五冊
光源氏時勢粧　五冊
善悪身持扇　五冊
三浦大助節分寺　五冊
右大将鎌倉覚記　五冊
風流神代卷　近日出来　五冊
児鎧甲州軍記　近日出来　五冊
曦太平記　五冊

雷神不動櫻　五冊
薄雪音羽滝　五冊
風流日本荘子　五冊
契情太平記　五冊
大系圖蝦夷新　五冊
弓張月曙櫻　五冊
曾我利御伽物語　近日出来　五冊
阿漕浦三巴　五冊
今昔出世扇　五冊

花楓鈔本地　五冊
小野皇恋鈴舟　五冊
賴信花軍記　五冊
道成寺岐柳　五冊
優源平歌袋　五冊
夕霧有馬松　五冊
石合維錦嶌　五冊
壇浦女見墓　五冊
歳徳五葉松　五冊

I —（E）

楠軍法鎧櫻　五冊
教訓私侭肩　五冊
本田善光像再前　五冊
逆澤浮鏡鑑　五冊
風流御伽曽我　五冊
風流東鑑　五冊
賴朝三代鎌倉記　五冊
西海太平記　五冊
中將姫誓未遂　五冊

（三）
雀進能舞臺櫻　五冊
曽根崎情鶴　五冊
茶花金琴合　五冊
今昔諸国噺　五冊
物部学屋錦輦　五冊
都鳥妻恋笛　五冊
那智御山多賀瀧　五冊
愛宴初冠女筆始　五冊
高砂大嶋葦　五冊
花色紙襲詞　五冊

風流川中嶋　五冊
賴政現在蛸　五冊
御伽太平記　五冊
教訓能楽形氣　近日出来　五冊
當世藝者形氣　近日出来　五冊
桜御殿邯鄲枕　五冊
大系図後日噺　近日出来　五冊
南木葬日記　五冊

I —（F）

分里艶行脚　横本　五冊
風流竈照君　同　五冊
傾城哥三味線　同　五冊
傾城友三味線　同　五冊
當世鍬背物　近日出来　五冊
世間化物質氣　五冊

風流誹平家　横本　五冊
義経風流鑑　同　五冊
傾城野郎談　同　五冊
野傾咲分色好　同　五冊
起揚小法師　近日出来　五冊
世間自慢顔　五冊

男女伊勢風流　横本　五冊
愛教青色好　同　六冊
風流東海硯　同　五冊
風流西海硯　同　五冊
加古川本外綱目　五冊

板元　大坂心斎橋南二丁目角　升屋彦太郎
賣所　京都寺町通松原下ル町　梅村市兵衛
同　江戸日本橋通三丁目　前川六左衛門

I —（G）

よみ本目録　書林　大坂しんさいばし　北詰　いつみ屋卯兵衛板

都鳥妻恋笛　五冊
女郎人綴錦　五冊
今川一睡記　五冊
西海太平記　五冊
曽我太平記　前編　五冊
彩色歌相撲　五冊
南木秀日記　五冊
契清遠茶山　五冊
今昔出世扇　五冊
陽炎日高川　五冊
敦盛源平桃　五冊
風流川中嶋　五冊
頼政現在鵺　五冊
道成寺岐柳　五冊
御伽曽我　前編　五冊
御伽平家　前編　五冊
百合雅錦嶋　五冊
龍都俵系図　五冊
風流扇軍　後編　五冊
富士浅間裾野撰　五冊
薄雪音羽瀧　五冊
風流東鑑　後編　五冊
於国歌舞妓　五冊
風流宇治頼政　五冊
当世信玄記　五冊
柿本人丸誕生記　五冊
御前義経記　八冊
同　花恵顔　五冊
古今実物語　四冊
同　はなし捕　五冊
織田真記　拾冊
神国芦分舟　増続大全　三冊
古今初音大鑑　五冊
養生主論　一冊
かるロ鏑の的　五冊
両面常盤深　五冊
風流庭訓往来　五冊
頼信玉軍記　五冊
楠正成艶軍談　五冊
老子形氣　五冊
筆道指南大成　永字八法十体の筆法ひとえ　一冊
歳時古実　年中の古実をひらがなにてひとえす　四冊
兵法奥儀抄　兵術を初心の見やすき図をあらはす　二冊
蒔絵大全　御かぶいかんぶし其外陸物まき絵　五冊
婦人療治手祖底　婦人一切の病ひ産前後妙やく　一冊
万世秘事枕　傷受なしまじない妙薬其外重宝　三冊
世宝傳受袋　うえ木のやしないやくものたくはへやう　三冊
珍伝さんげ袋　手づまの紙ざいくかか絵のしやう　二冊
續さんげ袋　左にもれたる事あつむる　二冊
新砂石集　三剣の事跡をひらがなにてしるす　五冊

Ⅱ―（1）　　Ⅱ―（2）